和水町文化財調査報告　第５集

内田今城跡

（旧）菊水町所在の中世城跡

2009年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告　第５集

内田今城跡

（旧）菊水町所在の中世城跡

2009年

熊本県玉名郡和水町教育委員会

序　文

和水町では、合併前の平成10年度より旧菊水町内に残る中世城跡の調査を実施してきました。これまで、10か所の城跡「焼米城跡・萩原城跡・用木城跡・牧野城跡・乙城跡・小乙城跡・江田城跡・立石城跡・内田宮山城跡・和仁石山城跡」について調査を終え、５冊の報告書を刊行しました。今年度はさらに「内田今城跡」の調査結果を報告することになりました。

今回調査を実施しました「内田今城跡」が所在する内田地区一帯には、すでに報告しております「内田宮山城跡」「和仁石山城跡」があります。これで一帯の城跡群の縄張りがすべて明らかになった訳ですが、同地区内に３城跡が存在することは興味深い事例であります。

また、内田今城跡内にある江戸時代の墓地には、内田源兵衛（初代内田手永惣庄屋）一族の墓碑があり、城跡と何らかの関係があったことが伺え、当時の様子が徐々に解明されていくものと期待します。

本報告書が、郷土の文化財に対する理解を深め、保護・研究に役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたっていただいている県立装飾古墳館の大田幸博館長をはじめとする関係各位に心からお礼申し上げます。

平成21年３月31日

和水町教育長　相　澤　紘　一

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査の組織 …… 1
　第２節　調査の取り組み …… 1
　第３節　旧菊水町の合併史 …… 1
　第４節　旧村と中世城跡 …… 2
　第５節　町の地勢と旧菊水町所在の中世城跡 …… 2
　第６節　交通と中世城跡の所在地 …… 2
　第７節　城跡と地名 …… 4

第Ⅱ章　調査の成果 …… 6
　第１節　城跡の概要 …… 6
　第２節　城跡と地形 …… 6
　第３節　城跡とアクセス …… 6
　第４節　縄張り …… 13
　　〔Ⅰ郭〕 …… 13
　　〔Ⅱ郭〕 …… 13
　　〔Ⅲ郭〕 …… 14
　　〔堀切〕 …… 14
　　〔Ⅳ郭〕 …… 14
　第５節　金石文調査 …… 30
　　〔内田氏一族の墓所〕 …… 30
　　〔江戸時代の墓地　Ⅰ郭南西下〕 …… 34

第Ⅲ章　まとめ …… 36

〔資料〕　内田地区のお祭りについて　　居石裕臣 …… 37

写真図版 …… 43

挿 図 目 次

第１図　熊本県玉名郡和水町位置図
第２図　旧菊水町所在の中世城跡
第３図　内田地区所在の三城跡位置図および字図
第４図　内田今城跡周辺地形図
第５図　内田今城跡周辺地籍図
第６図　内田今城跡全体測量図
第７図　内田今城跡測量図①
第８図　内田今城跡測量図②
第９図　内田今城跡測量図③
第10図　内田今城跡測量図④
第11図　内田今城跡測量図⑤
第12図　内田今城跡測量図⑥
第13図　内田今城跡測量図⑦
第14図　内田今城跡測量図⑧

第15図　内田今城跡測量図⑨
第16図　内田今城跡測量図⑩
第17図　内田今城跡測量図⑪
第18図　内田今城跡測量図⑫
第19図　内田今城跡測量図⑬
第20図　内田今城跡測量図⑭
第21図　内田氏一族の墓所　位置図
第22図　内田氏一族の墓所
第23図　石碑実測図
第24図　初代内田源兵衛　墓石実測図
第25図　初代内田源兵衛　献燈籠実測図
第26図　二代内田源兵衛　墓石実測図
第27図　二代内田源兵衛　献燈籠実測図
第28図　江戸時代の墓地〔Ⅰ郭南西下〕位置図
第29図　Ⅰ郭南西下 A箇所　墓石実測図①
第30図　Ⅰ郭南西下 A箇所　墓石実測図②
第31図　内田地区地蔵堂　位置図

写 真 図 版

図版１　内田今城跡　遠景（南西方向から）
図版２　内田今城跡　遠景（南から）
図版３　Ⅰ郭 → Ⅰ郭②
図版４　Ⅰ郭①（今城の一丁墓）
図版５　江戸時代の墓地　Ⅰ郭南西下 A箇所
図版６　Ⅰ郭④・Ⅰ郭－B間の法面
図版７　Ⅰ郭－A東下の帯状地形
図版８　Ⅰ郭－Cの痩せ馬地形（南→北）
図版９　Ⅱ郭②　西側法面の削り落とし（南→北）
図版10　Ⅱ郭②　西側法面の削り落とし（北→南）
図版11　Ⅱ郭①からⅡ郭②を見おろす（西→東）
図版12　Ⅱ郭②　北側法面の削り落とし
図版13　Ⅱ郭・Ⅲ郭間の痩せ馬地形（南→北）
図版14　Ⅲ郭（南→北）
図版15　Ⅲ郭南東下の帯状地形
図版16　Ⅲ郭北側の張り出し区画
図版17　堀切（西→東）
図版18　Ⅳ郭－B→堀切→Ⅲ郭北側の張り出し区画
図版19　Ⅳ郭 → Ⅳ郭①
図版20　Ⅳ郭・Ⅳ郭②間の法面
図版21　Ⅳ郭－A　江戸時代の墓地（北→南）
図版22　Ⅳ郭－A東側の帯状地形
図版23　Ⅳ郭－A東側の帯状地形

例　言

1．本書は、熊本県玉名郡和水町教育委員会が、平成19年度と20年度に実施した中世城跡の測量調査の報告書で、調査対象の城跡は「内田今城跡」である。文献に未記載の平山城で、城名は、城地の所在する内田地区と、字名「今城」を合わせたものである。
2．城名の初見は、熊本県教育委員会が刊行した『熊本県の中世城跡』である。
3．測量調査は、元町史編纂副委員長の大田幸博氏を中心に、益永浩仁（文化係参事）と居石裕臣（文化係参事）が行った。
4．本書の執筆は大田氏と益永・居石で行い、製図は石工みゆきさんと溝口真由美さんの助力を得た。編集も同メンバーで行った。

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の組織

調 査 主 体　　和水町教育委員会

調査責任者　　相澤紘一（教育長）

調　査　者　　大田幸博（元町史編纂副委員長）　益永浩仁（文化係参事）　居石裕臣（文化係参事）

調 査 補 助　　石工みゆき　溝口真由美

調査事務局　　宮地幸子（総合教育課長）　黒田裕司（文化係長）

現 場 担 当　　奥井　孝

第２節　調査の取り組み

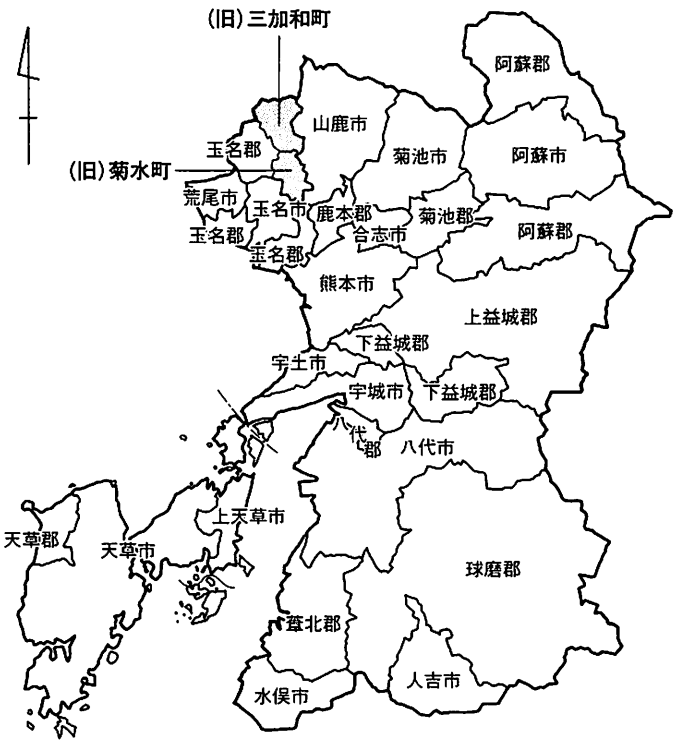
旧菊水町の町史編纂事業は平成13年度から開始し、平成19年3月に『通史編』・『江田船山古墳編』を刊行して終了した。その町史編纂事業の一環として、平成10年度より町内に残る中世城跡の調査を先駆けて行ってきたが、旧菊水町内の城跡は15城跡の多くを数えるために、内田今城跡・日平城跡・江栗城跡が事業期間内に測量できなかった。そのため町史には、踏査によって作成した略測の縄張り図を記載したに留まった。そこで町教委では、補足調査として平成19年度から町内の山城調査を立ち上げた。そして、内田今城跡の調査測量から取りかかったが、最終的に、城域は全長600mに及び、大方、竹林や下草の繁茂するところであった。そのために、調査は困難を極め、終了までに２年の歳月を要した。

調査は、元町史編纂副委員長の大田幸博氏が中心となって、益永と居石が実施した。平行して調査報告書の作成を行い、年度末に刊行した。次年度は、日平城跡の調査を予定している。（居石裕臣）

第３節　旧菊水町の合併史

明治９年、熊本県下となって合併が行われた。請村と白石村は「瀬川村」に、江田村と上江田村は「江田村」に、用木村と上用木村は「用木村」に、下津原村・西下津原村・東下津原村・菰田村は「下津原村」に、久井原村と下久井原村は「久井原村」になった。

明治22年、市制町村制が施行され２回目の合併が行われた。瀬川村・藤田村・前原村・原口村・江田村は「江田村」に、日平村・蜻浦村・萩原村・用木村は「花簇村」に、米渡尾村・榎原村・大屋村・久米野村・岩尻村・高野村・志口永村・焼米村・下津原村は「東郷村」に、久井原村・内田村・長小田村・江栗村・竈門村が「川沿村」となった。明治45年まで、江田村と花簇村は組合村を形成した。



第１図　熊本県玉名郡和水町位置図

昭和18年に江田村は「江田町」に、昭和29年4月1日に江田町・花簇村・東郷村・川沿村が合併して「菊水町」が成立した。平成18年３月１日に菊水町と三加和町が合併し、「和水町」が誕生した。

（『菊水町史』　通史編　第四編　中世）

第４節　旧村と中世城跡

請村に鷲原城跡。原口村に立石城跡。江田村に江田城跡・牧野城跡・乙城跡・小乙城跡。萩原村に萩原城跡。用木村に用木城跡。日平村と蜻浦村に日平城跡。志口永村に志口永城跡。焼米村に焼米城跡。内田村に内田宮山城跡・内田今城跡・和仁石山城跡。江栗村に江栗城跡。この中では、江田村に４城跡、内田村に３城跡が集中している。

第５節　町の地勢と旧菊水町所在の中世城跡

県北に位置し、町の面積98.75k㎡、北および北東部には福岡県境から延びる山並みが迫っており、東部境に米野山、南東部境に国見山があり町内に低丘陵が卓越する。菊池川は町内の中央部で大蛇行し、和仁川・岩村川・久米野川・江田川・久井原川・内田川などを合わせて、南西方向の玉名市側へ流れている。

萩原城跡は標高221.47m、日平城跡は標高342.2mの高山に築かれている。江田の四つ角付近は標高14.8m。麓からは、かなりの比高差となる。両城跡は、戦国時代の一円支配の中に存在した戦闘城であった。平時は、領民が仰ぎ見るシンボル的な山城で、一旦、有事となれば、一大拠点として山中で白兵戦が行われた。

萩原城跡には、岩盤を掘削した大堀切が残る。麓集落は萩原地区であるが、近隣の諸井地区や鹿央町（山鹿市）の寺米野地区にも登城口がある。『肥後国誌』に縄張りが記録されている。

日平城跡のⅢ郭には、直径3.8mの掘り抜き井戸がある。麓集落は、北東麓に蜻浦地区、北西麓に日平地区がある。天正10年（1582）10月、八代まで進出していた薩摩の島津氏は、龍造寺氏勢力を一掃するために、肥後北部へ軍を進めた。同年12月9日から22日までの動きは、『八代日記』に記録が残り、日比良城としての記載がある。山頂域を中心に、山城としての大規模な遺構が残っている。

低丘陵地（標高42.1m～標高86.3m）に築かれた城跡は、焼米城跡（標高82.6m）・志口永城跡（標高86.3m）・内田宮山城跡（標高48.8m）・内田今城跡（標高44.3m）・和仁石山城跡（標高66.3m）・用木城跡（標高60.6m）・牧野城跡（標高60.7m）・小乙城跡（標高82.3m）・乙城跡（標高83.4m）・江田城跡（標高42.1m）・立石城跡（標高48.9m）・江栗城跡（標高58m）・鷲原城跡（標高63.3m）の13城跡である。

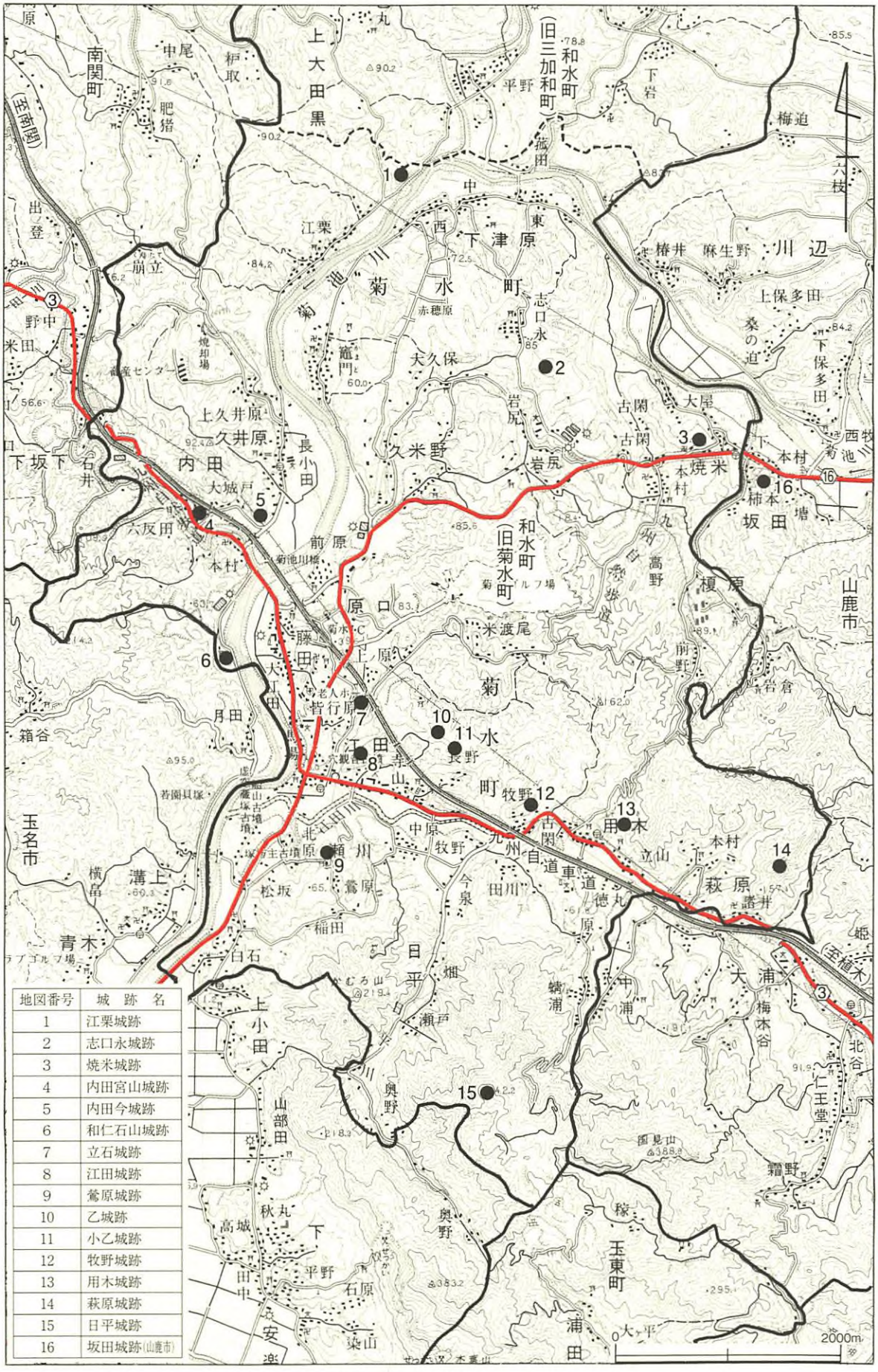
焼米城には、焼米五郎の伝説が残る。『蒙古襲来絵詞』の「絵一三」（弘安の役の海戦が描かれている）に竹崎季長の兵船に乗る「やいこめの五郎」が見える。和仁石山城には、田中城（旧三加和町）が天正15年（1587）に肥後の国衆一揆で落城した時、城を出た和仁親範（城主・和仁親實の弟）の妻と子の悲話が残る。牧野城には、国衆一揆の終結直後の物語がある。この場合も城主の子女が乳母に連れられて城を出ている。江田城は、江田氏の存在が根底になる。『蒙古襲来絵詞』の「詞一」に「ゑたの又太郎ひていゑ」なる人物がいる。

これらの城跡は、すべて平山城で、各城跡に小規模な麓集落がついている。中世の「一村一城」スタイルで、生活密着型の城である。

（『菊水町史』　通史編　第四編　中世）

第６節　交通と中世城跡の所在地

主要地方道玉名・山鹿線（以下、玉名・山鹿線）、主要地方道大牟田・植木線（以下、大牟田・植木線）、主要地方道玉名・立花線（以下、玉名・立花線）、県道竈門・菰田・山鹿線、県道和仁・菊水線が、旧菊水町内を走行する。主要地方道は昔の往還である。昭和40年代には、九州自動車道が町内を北西方向から南東方向へ通り抜けた。



地図番号	城跡名
1	江栗城跡
2	志口永城跡
3	焼米城跡
4	内田宮山城跡
5	内田今城跡
6	和仁石山城跡
7	立石城跡
8	江田城跡
9	鶯原城跡
10	乙城跡
11	小乙城跡
12	牧野城跡
13	用木城跡
14	萩原城跡
15	日平城跡
16	坂田城跡(山鹿市)

第２図　旧菊水町所在の中世城跡

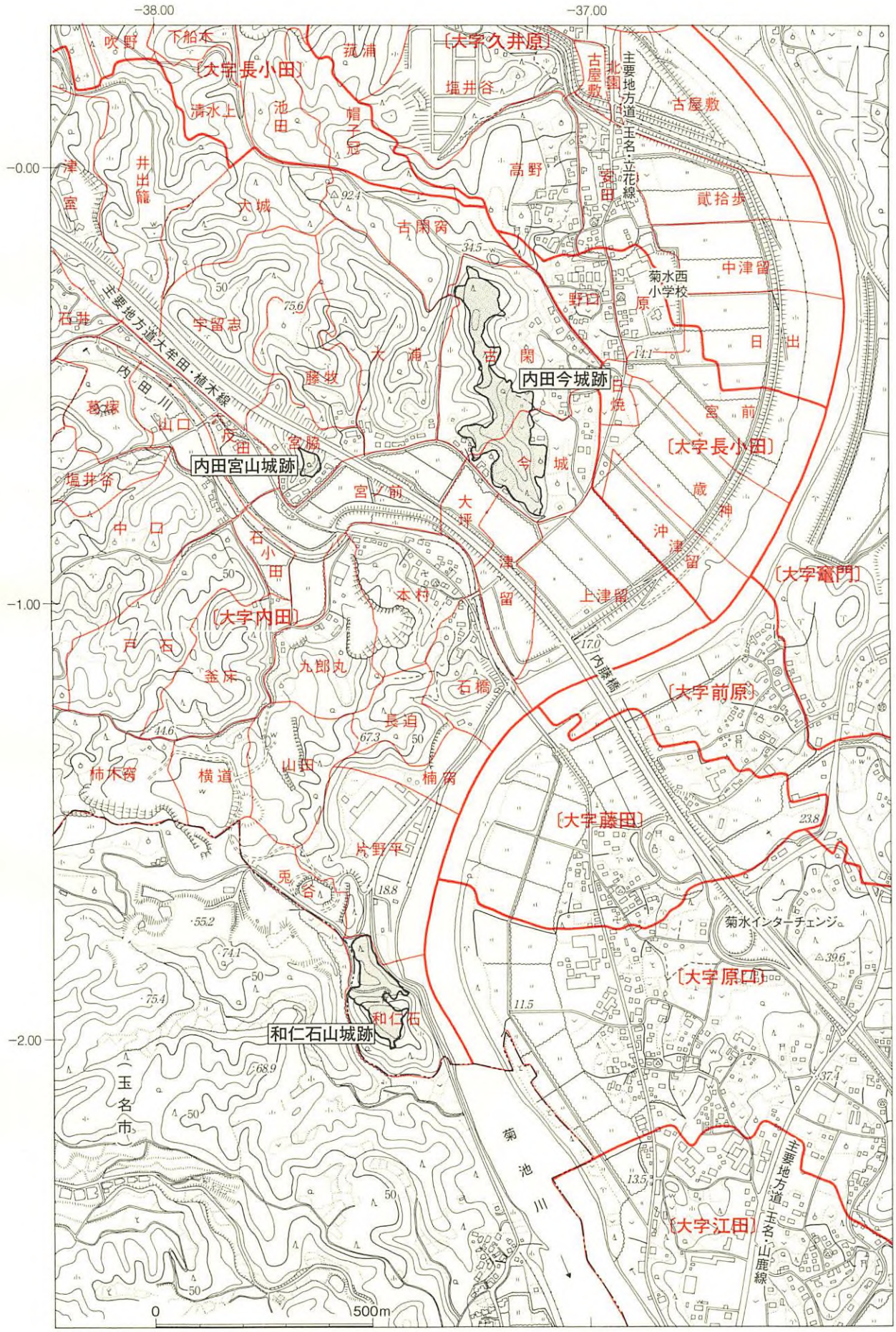
玉名･山鹿線沿いに、焼米城跡～立石城跡。焼米城跡の麓集落は、沿線北下の菊池川流域に展開している。大牟田・植木線沿いに、萩原城跡～用木城跡～牧野城跡～小乙城跡～乙城跡～江田城跡～内田今城跡～内田宮山城跡。玉名・立花線沿いには和仁石山城跡。内田今城跡は同線沿いでもある。和仁・菊水線沿いには江栗城跡がある。

第7節　城跡と地名

中心地に城跡関連の字名や小名を残すのが、萩原城跡（字名:城内、小名:城山）、小乙城跡（字名:小乙城）、乙城跡（字名：乙城）、用木城（小名：城の尾）、志口永城跡（字名：城尾、小名：城の山）、焼米城跡（小名：城山）、内田今城跡（字名：今城）、江栗城跡（字名：城尾）。周囲にも関連地名を残すのが、江田城跡・立石城跡・内田宮山城跡。和仁石山城跡は、城地としての伝承がある。　（『菊水町史』 通史編　第四編　中世）

番号	城　名	所在地（地名）	分類（標高）	沿　線	備　考
1	江栗城跡	大字　江栗 字　城尾	平山城 （標高57.5 m）	和仁・菊水線 菊池川沿岸	・文献未記載
2	志口永城跡	大字　志口永 字　城尾 小名　城の山	平山城 （標高86.3 m）	——	・文献未記載
3	焼米城跡	大字　焼米 字　飛松 小名　城山	平山城 （標高82.6 m）	玉名・山鹿線 菊池川沿岸	・文献未記載 ・『蒙古襲来絵詞』 焼米五郎
4	内田宮山城跡	大字　内田 字　宮脇	平山城 （標高48.8 m）	大牟田・植木線	・文献未記載 ・城山の呼称
5	内田今城跡	大字　内田 字　今城・古閑	平山城 （標高40.0 m）	大牟田・植木線 玉名・立花線	・文献未記載
6	和仁石山城跡	大字　内田 字　和仁石	平山城 （標高66.3 m）	玉名・立花線 菊池川沿岸	・文献未記載 ・城地としての伝承 ・城山の呼称
7	立石城跡	大字　原口 字　野付	平山城 （標高48.9 m）	玉名・山鹿線	・文献未記載 ・城跡関連の石塔・伝承が残る
8	江田城跡	大字　江田 字　江光寺	平山城 （標高42.1 m）	大牟田・植木線	・文献未記載 ・『蒙古襲来絵詞』ゑたの又太郎ひていゑ ・城山の呼称
9	鴛原城跡	大字　瀬川 字　鴛原	平山城 （標高63.3 m）	玉名・山鹿線	・『古城考』
10	乙城跡	大字　江田 字　乙城	平山城 （標高83.4 m）	大牟田・植木線	・文献未記載
11	小乙城跡	大字　江田 字　小乙城	平山城 （標高82.3 m）	大牟田・植木線	・文献未記載
12	牧野城跡	大字　江田 字　牧野	平山城 （標高60.7 m）	大牟田・植木線	・『古城考』 ・『肥後国誌』
13	用木城跡	大字　用木 字　上河原毛 小名　城の尾	平山城 （標高60.6 m）	大牟田・植木線	・『国郡一統志』
14	萩原城跡	大字　萩原 字　城内 小名　城山	山城 （標高221.47 m）	大牟田・植木線	・『古城考』 ・『肥後国誌』 ・『国郡一統志』 ・『肥後地志略』
15	日平城跡	大字　日平 字　花簇	山城 （標高342.2 m）	——	・『古城考』 ・『肥後国誌』 ・『八代日記』

旧菊水町所在の中世城跡一覧表



第３図　内田地区所在の三城跡位置図および字図

第Ⅱ章　調査の成果

内田今城跡（所在地：玉名郡和水町 大字内田 字今城・古閑）

第１節　城跡の概要

文献記録にない城跡である。「今城（いまじょう）」の字名から城地の存在が伺い知れる。確たる遺構に「堀切」と「法面の削り落し」がある。地形的にも、城地に相応しい恰好をしている。縄張りの説明に際しては、測量図面の中で、主要ポイントをⅠ郭～Ⅳ郭とした。

城地としての認識は、熊本県教育委員会が実施した中世城跡の悉皆調査を最初とする。文化庁の補助事業として昭和50～52年に県内一円で実施されもので、成果は、『熊本県の中世城跡』（熊本県文化財調査報告第30集1978年）として県教委から刊行された。その中で、この城地は、「内田の今城」として報告されている。城名は地区名と字名による。旧菊水町教委が作成した町内の文化財マップには、「内田今城跡」としている。

第２節　城跡と地形

内田地区の古閑には、北からの帯状低丘陵地が、菊池川流域の南側へ穏やかに下っている。低丘陵地の本体は権現山（標高92.4m、通称：ごんげんさん）で、地形の変化点が町道で切られており、この凹道箇所が城地の北端である。全長600mの丘頂ラインには、堀切や法面の削り落しのほか、５か所に小山状の高まりがあり、それらを繋ぐ痩せ馬地形も、縄張りの構成要素となっている。

城地の南下と東下は、町道内田線と県道玉名・立花線が、裾部をぐるりと取り囲んでいる。程無い距離の西下方向には、九州自動車道を挟んで、大牟田・植木線が走行する。玉名・立花線と城地の間には、古閑の麓集落が展開しており、周辺地形を拡大すれば、その外域に菊池川の蛇行がある。古閑集落との間には、川岸に水田地帯が広がり、この状態が南西側まで拡大している。城地の周辺地形としては、極めて好ましい状況にある。

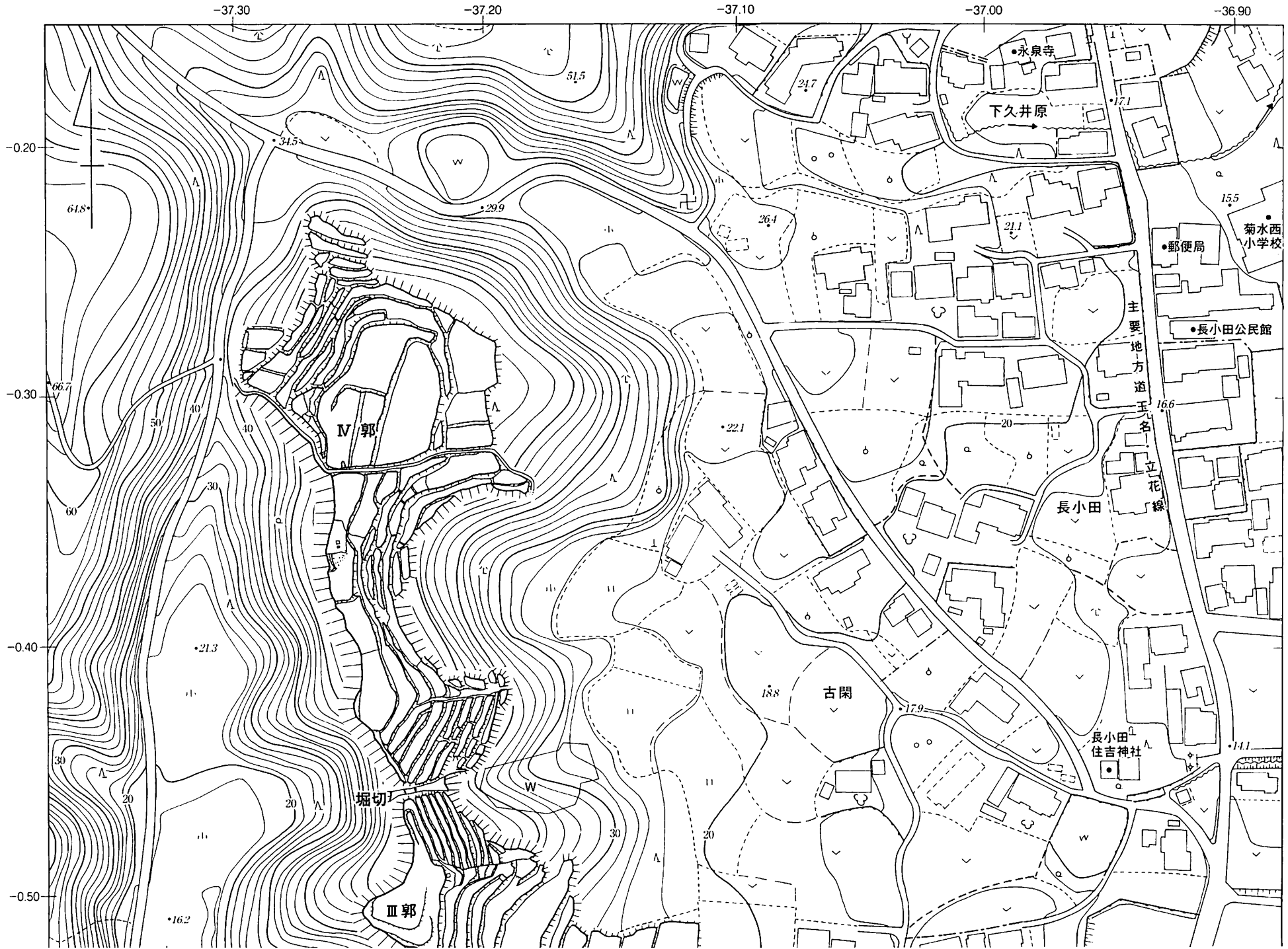
第３節　城跡とアクセス

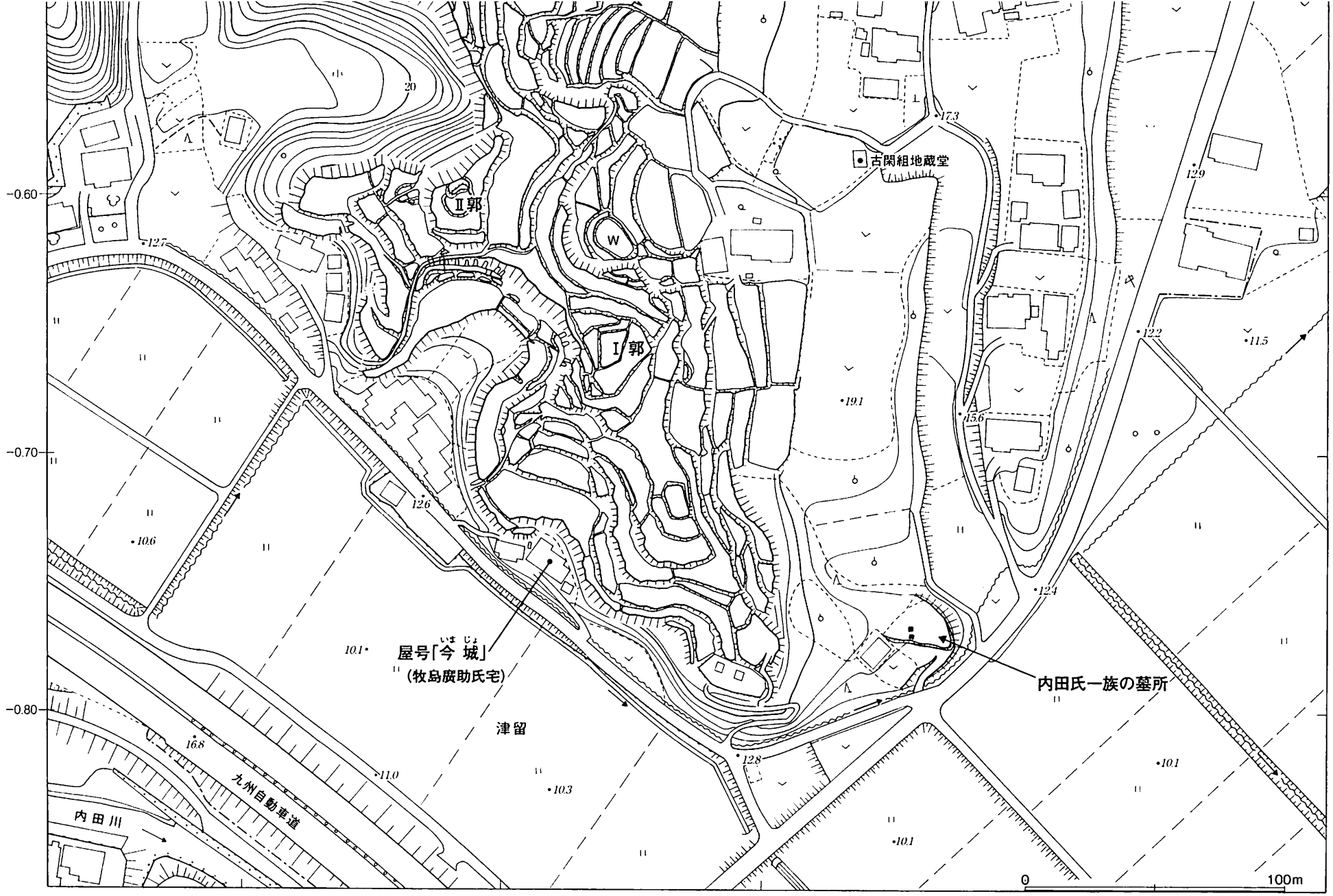
江田地区の四つ角から、大牟田・植木線を北進して、菊池川に架かる内藤橋を渡ると「内田」バス停留がある。この先から東に分岐した道路が玉名・立花線である。内田川に架かる石橋（眼鏡橋）を渡って、九州自動車道のガード下を潜ると、左手に低丘陵の先端部が見えてくる。この地が、今回調査の対象地となった城地である。上り道は、北端域のⅣ郭へ至る小道が最も古く、その他に、Ⅱ郭へ至る東西両下からの２ルートがある。

〔城跡と地元〕

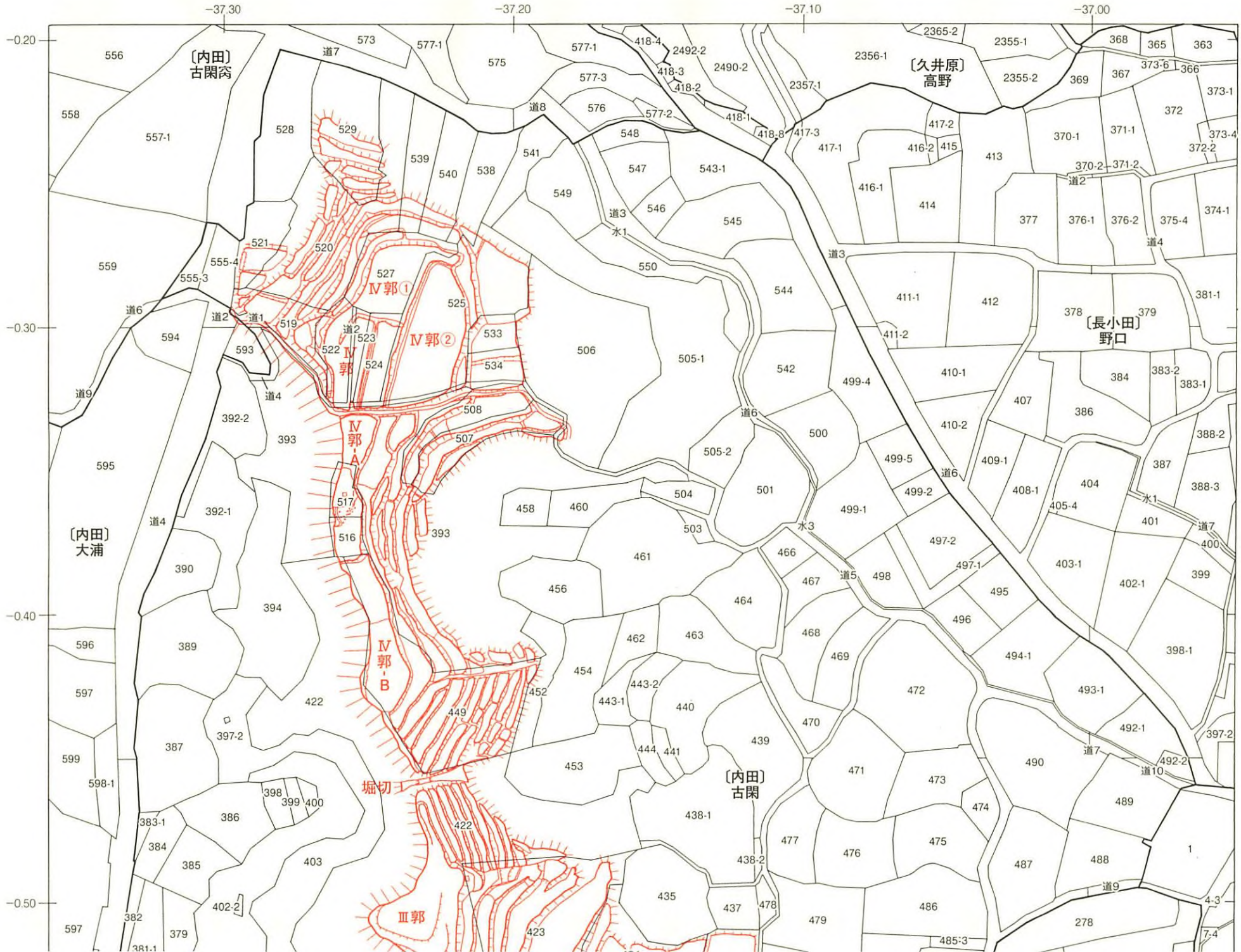
Ⅰ郭を含む南域を普段から「今城（いまじょう）」と呼んでいる。西下の町道沿いの牧島廣助氏宅の屋号も「今城（いまじょ）」である。「地名からして、この地は昔の城跡なのだろう」との見方で、焼米城跡や日平城跡で見られるような、地元と城跡の強い繋がりはない。以前は、一部がミカン畑になっていたが、現在は、大方、杉・檜の植林地と畑地で、荒れ地も目立つ。

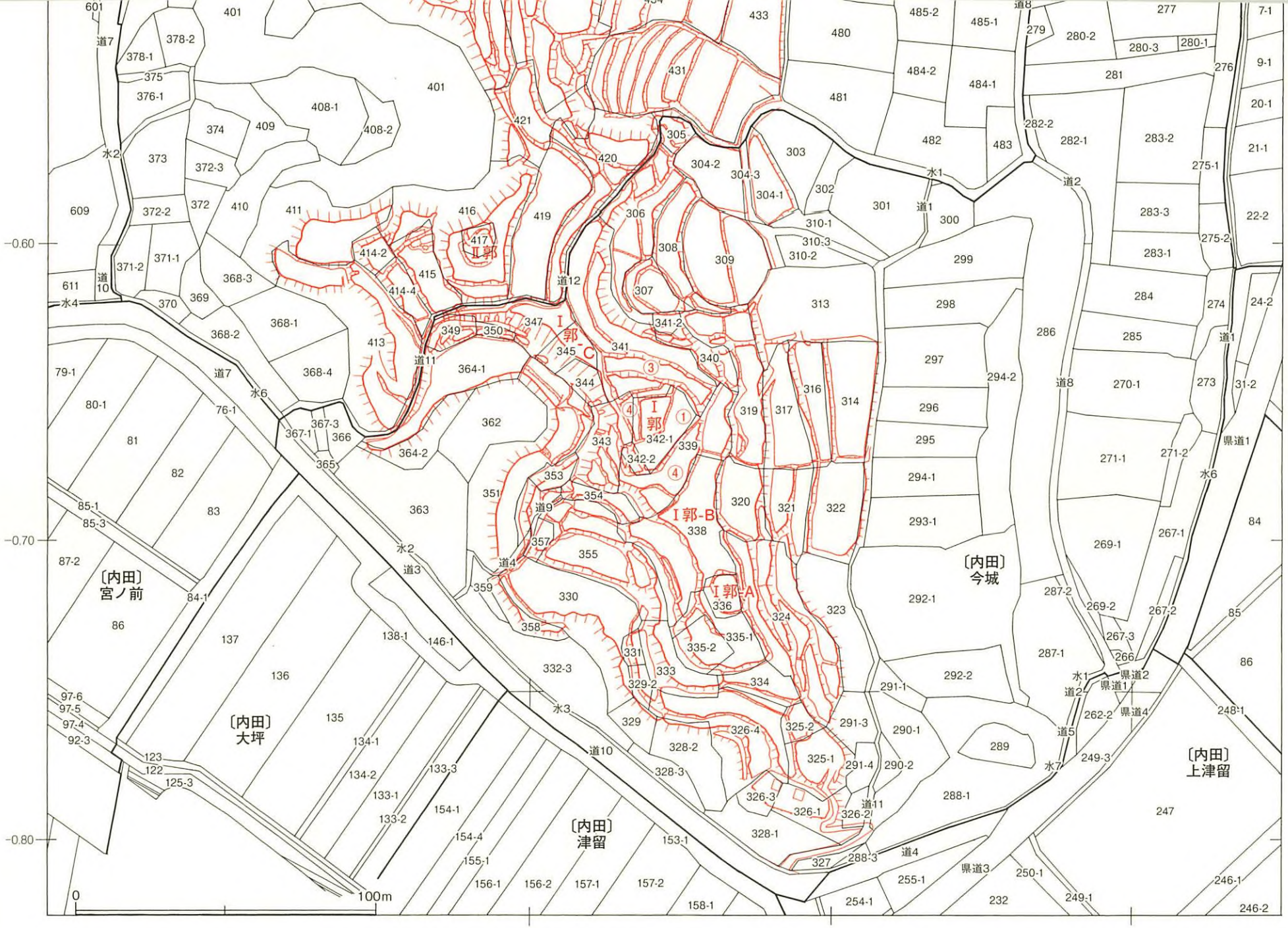
城内の数か所に残る墓所は、江戸時代前期を上限として中世まで遡らない。これらの墓碑についても今回、調査を行った（→34頁）。さらに、内田地区のお祭りについても取材した（→37頁）。


−37.30
−37.20
−37.10
−37.00
−36.90
−0.20
−0.30
−0.40
−0.50
永泉寺
下久井原
菊水西小学校
郵便局
長小田公民館
主要地方道 玉名立花線
長小田
古閑
長小田住吉神社
Ⅳ郭
Ⅲ郭
堀切
W



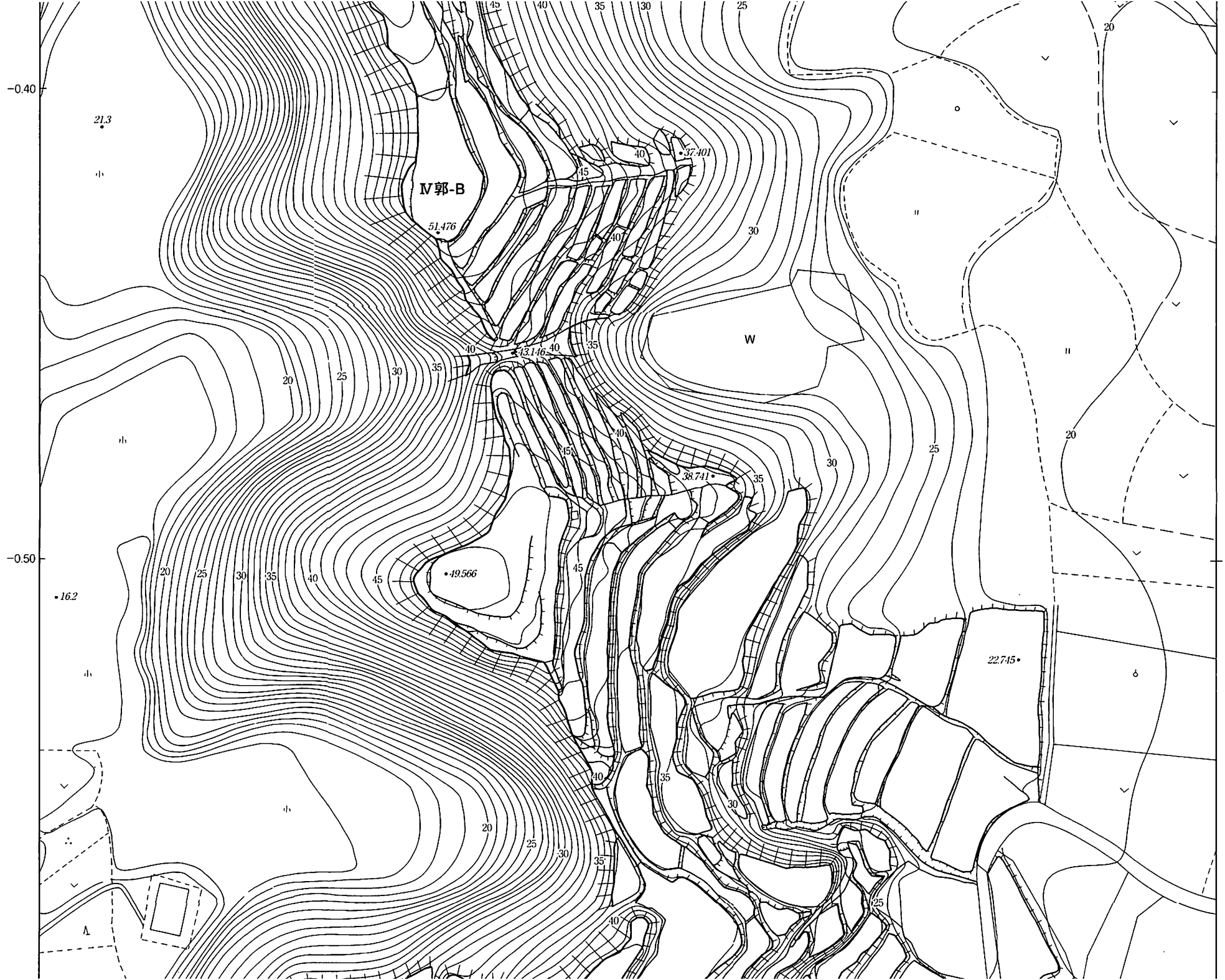
第４図　内田今城跡周辺地形図


−37.30
−37.20
−37.10
−37.00
−0.20
−0.30
−0.40
−0.50
〔内田〕
古閑窩
〔久井原〕
高野
〔長小田〕
野口
〔内田〕
大浦
〔内田〕
古閑
Ⅳ郭①
Ⅳ郭②
Ⅳ郭
Ⅳ郭-A
Ⅳ郭-B
Ⅲ郭
堀切
道1
道2
道3
道4
道5
道6
道7
道8
道9
道10
水1
水3



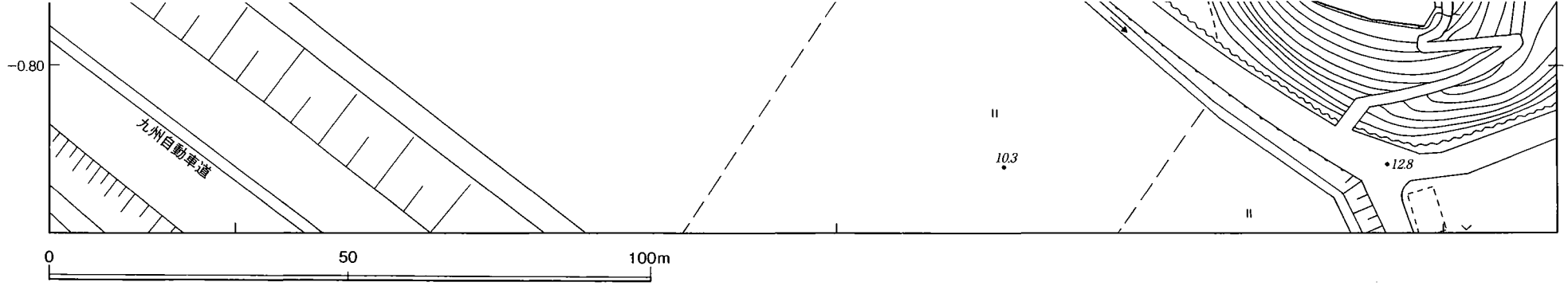
第５図　内田今城跡周辺地籍図

−37.30
−37.20
−37.10
−0.20
−0.30
W
Ⅳ郭①
Ⅳ郭②
Ⅳ郭
Ⅳ郭-A
江戸時代の墓地
34.5
29.9
38.576
41.547
40.417
50.600
56.141
55.611
44.201
54.806
22.1



Ⅳ郭-B
51.476
37.401
43.146
38.741
49.566
22.745
21.3
16.2
W
−0.40
−0.50

−0.60
−0.70
Ⅱ郭
Ⅱ郭②
Ⅱ郭③
Ⅱ郭①
Ⅰ郭-C
Ⅰ郭③
Ⅰ郭
Ⅰ郭①
Ⅰ郭④
Ⅰ郭-B
Ⅰ郭-A
江戸時代
の墓地
屋号「今城（いまじょ）」
（牧島廣助氏宅）
町
道
W
30.411
39.348
43.848
22.925
23.468
27.046
40.002
23.533
33.473
22.278
12.6
23.508
34.773
29.558
10.1



第６図　内田今城跡全体測量図

第４節　縄張り

〔Ⅰ郭〕

標高40m。一帯は「今城（いまじょう）」と呼ばれており、城跡の中心地と考えられる。丘頂部分は、長さ13m、幅7.0～11mの台形状の平地で、角隅に明治10年（1877）建立の墓石（呼称：今城の一丁墓）がある。この地を核として、複数の平場が鋭角三角形状にまとまる。

Ⅰ郭①は、東下と南下を巡り、比高差0.64m、長さ25m、幅5.8～10m。Ⅰ郭②は、北下と西下を巡り、比高差は北下で0.63m、西下も0.19mに留まる。規模は北下で長さ13m、幅1.8～3.8m、西下で長さ16m、幅は北端で8.8m、南端ですぼまっている。この３ブロックでⅠ郭の中心部が形成されている。周りには北下をⅠ郭③、南東下から南西下にⅠ郭④が巡る。

Ⅰ郭③は、典型的な帯状地形で、長さ37m、幅3.0～6.2m、Ⅰ郭②との比高差1.8m。Ⅰ郭④は、南東下で最大幅9.0m、南西下で最小幅1.6mに狭まる。比高差は南東下で2.7m、南西下で3.3m。南西下では、間の法面に二つの小段を挟んでいる。両平場とも上段からの法面は、削り落とされている。Ⅰ郭④の南西下は急峻な凝灰岩の崖となっており、横穴が４基残っている（今城横穴）。

Ⅰ郭－Ａは、丘陵地の先端寄りにあり、荒地であるが、江戸時代の墓所である。標高34.8m、長さ13m、幅7.0～8.4m。比高差は南下で0.9m、北下のⅠ郭－Ｂで1.2m。丘頂域としてのインパクトは無い。Ⅰ郭－Ｂは、Ⅰ郭とⅠ郭－Ａ間の痩せ馬地形である。平地で長さ52.5m、幅はⅠ郭④側で最大27m、Ⅰ郭－Ａ側で12.4m。Ⅰ郭④からの比高差は2.8m。Ⅰ郭－Ｃは、向こう側のⅡ郭を結ぶ痩せ馬地形である。平地で、長さ34m、幅はⅠ郭側で5.0m、Ⅱ郭側で2.0m、最大幅11m。比高差はⅠ郭④から1.6m。Ⅱ郭②からは5.0m。地形的にもこの箇所には、堀切の埋没が考えられる。北東下には、２段の犬走り地形が並走している。 南西下は、凝灰岩が露呈した急崖である。

〔Ⅱ郭〕

標高43.3mで、中心箇所は隅丸方形の小平場である。長さ10.5m、幅7.0m、北縁には高さ0.4m、幅1.0～1.6m、長さ7.0mの土塁が残る。Ⅱ郭①は、Ⅱ郭との比高差0.5m。北東側以外は方形状の平場で、中心部にⅡ郭が座っている。南縁で長さ18m、幅は東側で最小3.0m、西側で5.0m。北縁にはⅡ郭が裾部を下ろしている。北東側には帯状の張り出し平場があって、幅8.4～3.2m、長さ21m。Ⅱ郭②は、幅広い帯状地形で、長さ50.5m、

Ⅱ郭①・Ⅱ郭②間の急峻な法面

幅12～24m、Ⅱ郭①との比高差4.0m。特異な地形は、全長42mの法面に見られる。直の状態に削り落とされており、城跡で最も目立つ最大の遺構である。強烈な印象を与える土壁である。この平場の東下には、２段の犬走り地形が並走する。

Ⅱ郭③は、Ⅱ郭南下の小段である。比高差2.3m、長さ20.6m、幅は東端で3.4m、西端ですぼまる。これより南下は、小道を挟んで凝灰岩の急崖となる。この箇所には、９基の横穴が残っている（今城横穴）。西下には２段の幅広い帯状平場がある。Ⅱ郭①とⅢ郭の間は、丘陵の尾根筋が小道のように幅狭くなっている。これはⅢ郭の東下に帯状地形が並列するためで、後世の掘削によるものである。

〔Ⅲ郭〕

標高49.5mの広い平場であるが、削平の度合いが低く、真の意味での平地が造成されていない。自然地形がまだ残っている。丈の長い台形状平場で、長さ35m、幅34～13m。東下には４段の帯状地形が並列し、南下から西下にかけて急崖となっている。北東側には、長さ27m、幅2.0～3.5mの帯状の張り出し区画があり、これより東下には、幅の狭い帯状地形が８段連なっている。

〔堀切〕

Ⅲ郭の北下を断ち切っている。他城跡と同じ造りで、尾根筋の中央部を土橋状にやや掘り残して、東西両下へ竪堀状に掘り窪めている。堀底幅は中央部で1.8m、東下で幅6.2m、西下で2.8m、全長22m。上場幅は真中で4.0m。遺構の残り具合は、極めて良好である。

堀切（東→西）

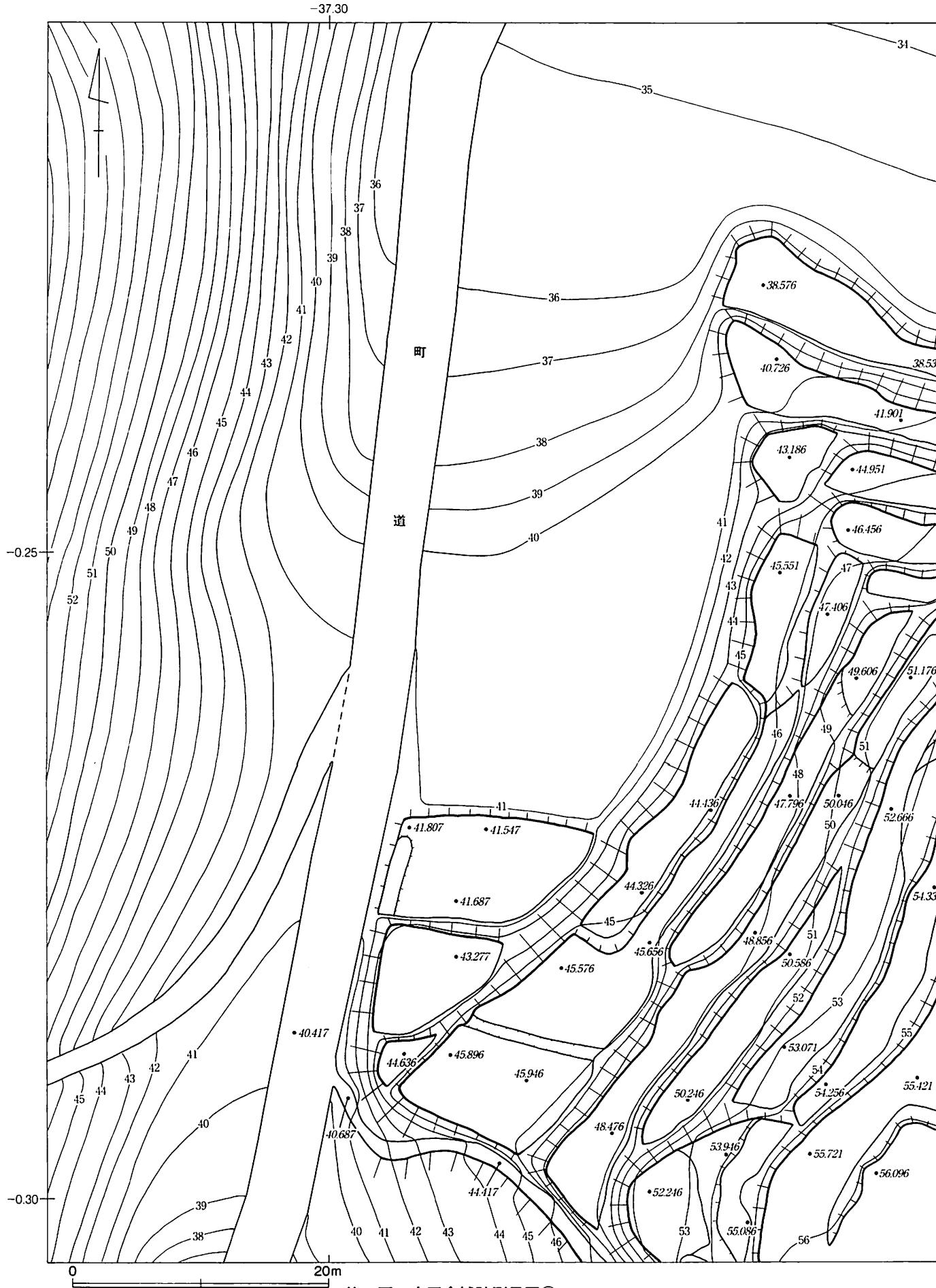
〔Ⅳ郭〕

丘陵地の北域にある平場で、標高56.2m。北西下に、権現山と城地を仕切る町道が走る。町道からの小道は、Ⅳ郭に上がって東側へ横断している。中心の平場は、長さ30.5m、幅は約18mで、西側にかけて地形が曖昧になる。Ⅳ郭①は、Ⅳ郭の北下にあり、比高差0.7m、長さ28.5m、幅16m。北東隅に、長さ10m、幅3.5mの小規模な張り出し区画がある。町道を見下ろす北西下の斜面部には、7段の帯状地形が並列している。Ⅳ郭②は東下にあり、半楕円形の平場である。比高差1.4m、長さは西縁で53m、幅は最大で19m。

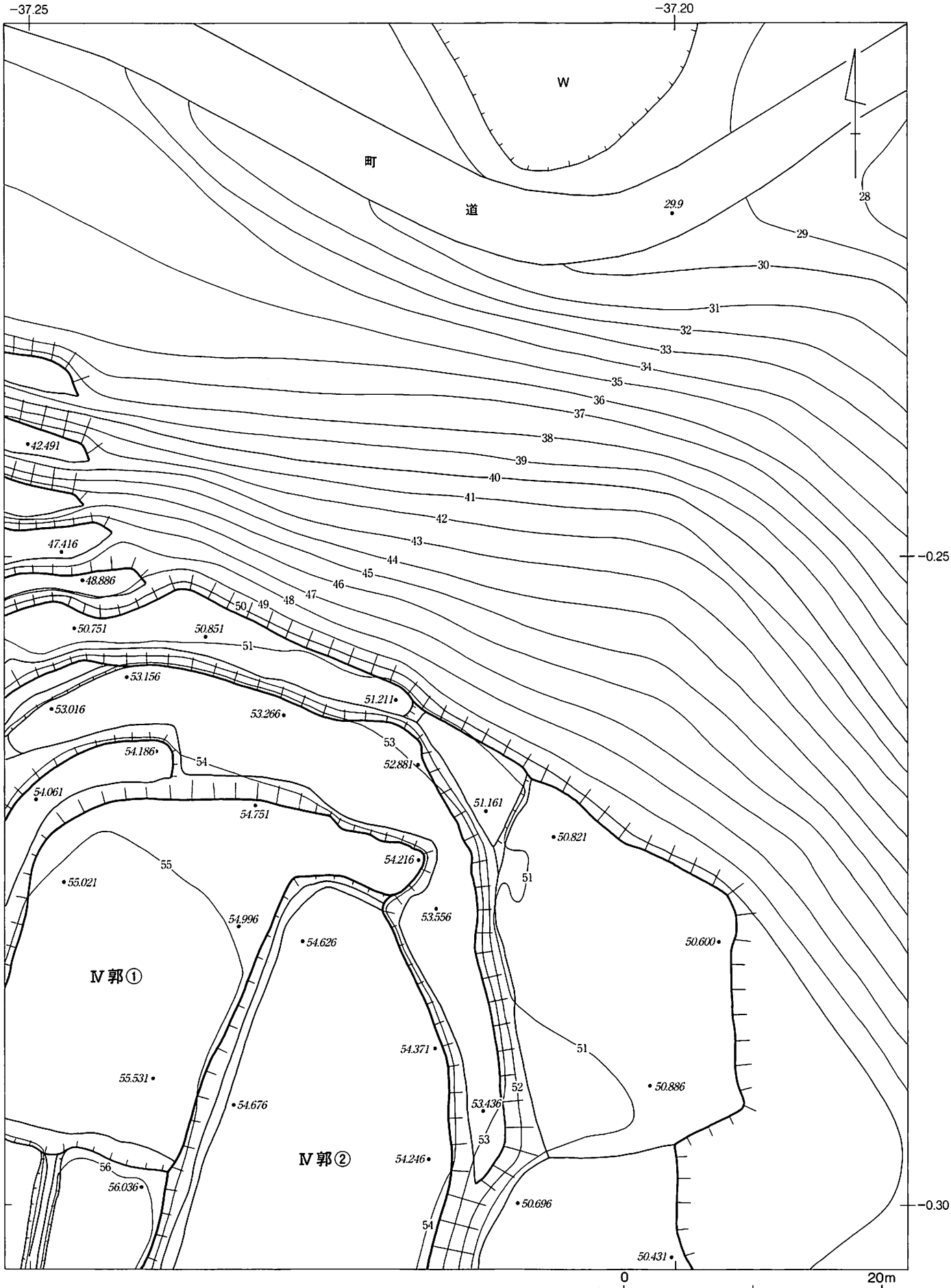
Ⅳ郭－Ａ・Ｂは、Ⅳ郭とⅢ郭を繋ぐ痩せ馬地形である。その端部に堀切が刻まれている。その箇所は、地形の変化点でもある。Ⅳ郭－Ａは、長さ31m、幅13～5.6m、町道から上る小道を北端とする。標高は、北端で55.6m、南端で54.8m。中央部分は、江戸時代の墓地で、延宝6年（1678）の墓碑を上限とする。Ⅳ郭－Ｂは、長さ53m、幅は7.0～17m、南側寄りで幅広となる。南端から堀切箇所へ小道が下っている。南東下には、幅の狭い帯状地形がびっしり８段並列する。

Ⅳ郭・Ⅳ郭－A間　町道からの小道

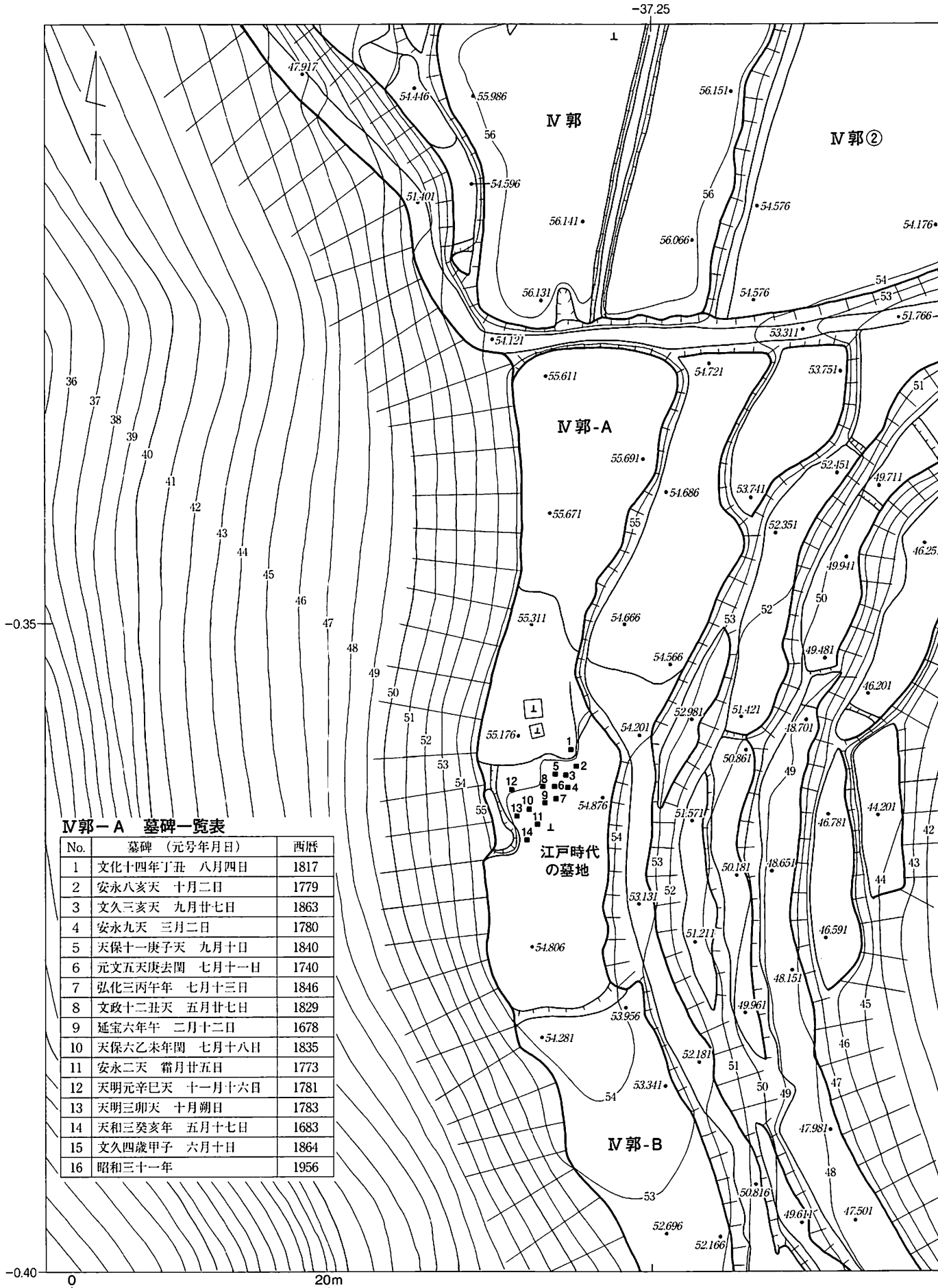
Ⅳ郭西側から西下の町道を望む



第７図　内田今城跡測量図①



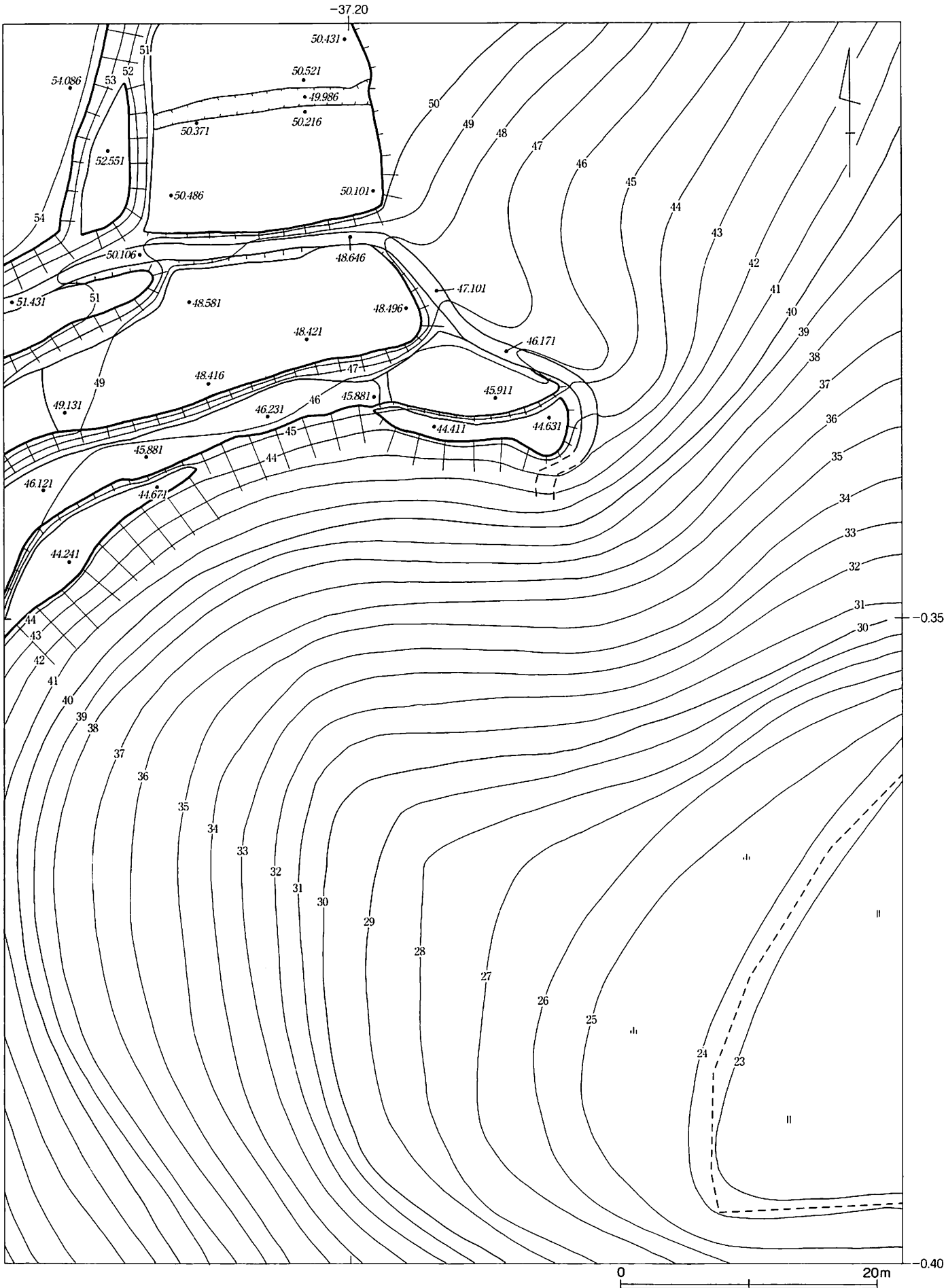
第８図　内田今城跡測量図②



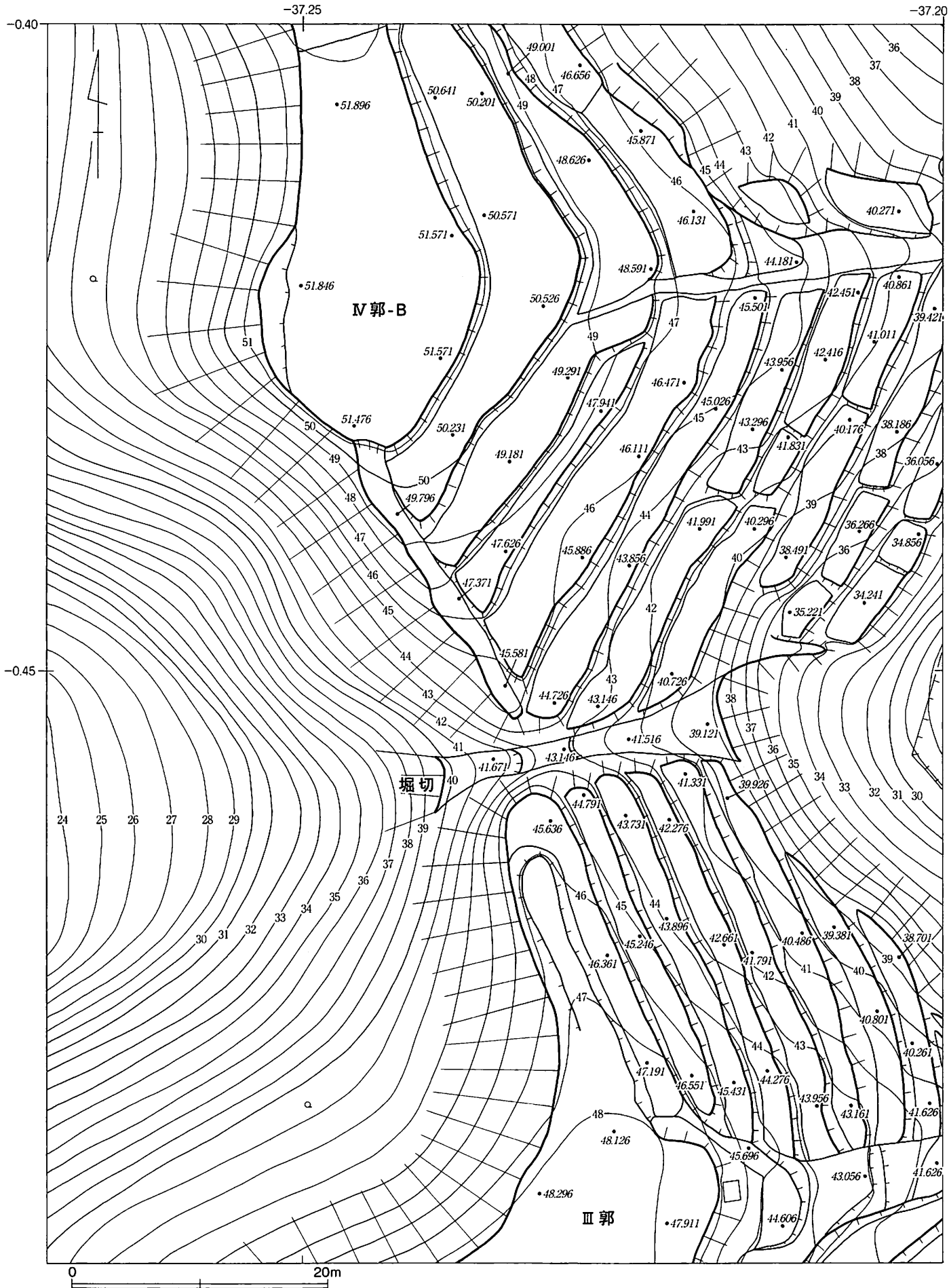
Ⅳ郭－A　墓碑一覧表

No.	墓碑　（元号年月日）	西暦
1	文化十四年丁丑　八月四日	1817
2	安永八亥天　十月二日	1779
3	文久三亥天　九月廿七日	1863
4	安永九天　三月二日	1780
5	天保十一庚子天　九月十日	1840
6	元文五天庚去閏　七月十一日	1740
7	弘化三丙午年　七月十三日	1846
8	文政十二丑天　五月廿七日	1829
9	延宝六年午　二月十二日	1678
10	天保六乙未年閏　七月十八日	1835
11	安永二天　霜月廿五日	1773
12	天明元辛巳天　十一月十六日	1781
13	天明三卯天　十月朔日	1783
14	天和三癸亥年　五月十七日	1683
15	文久四歳甲子　六月十日	1864
16	昭和三十一年	1956

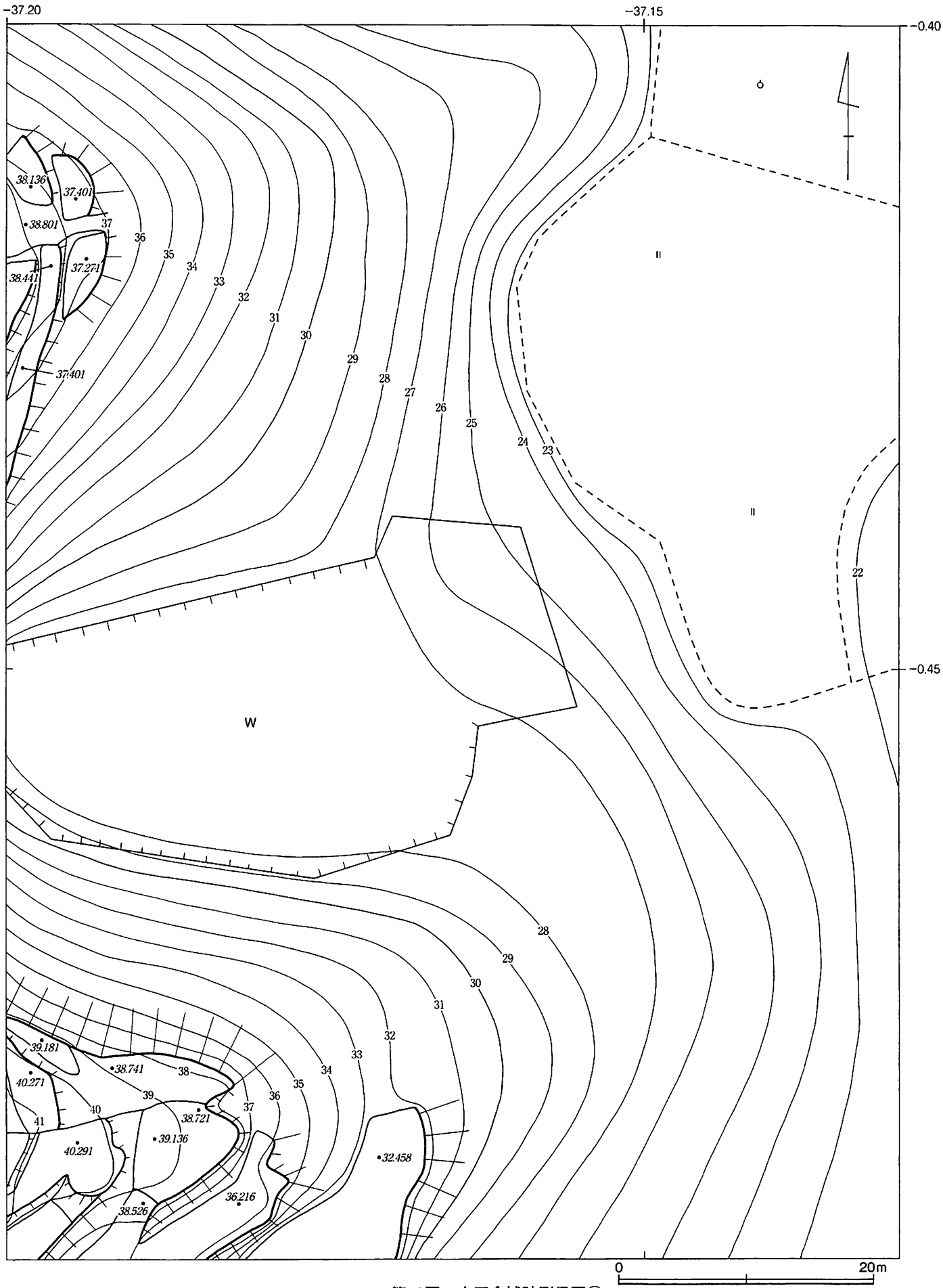
第９図　内田今城跡測量図③



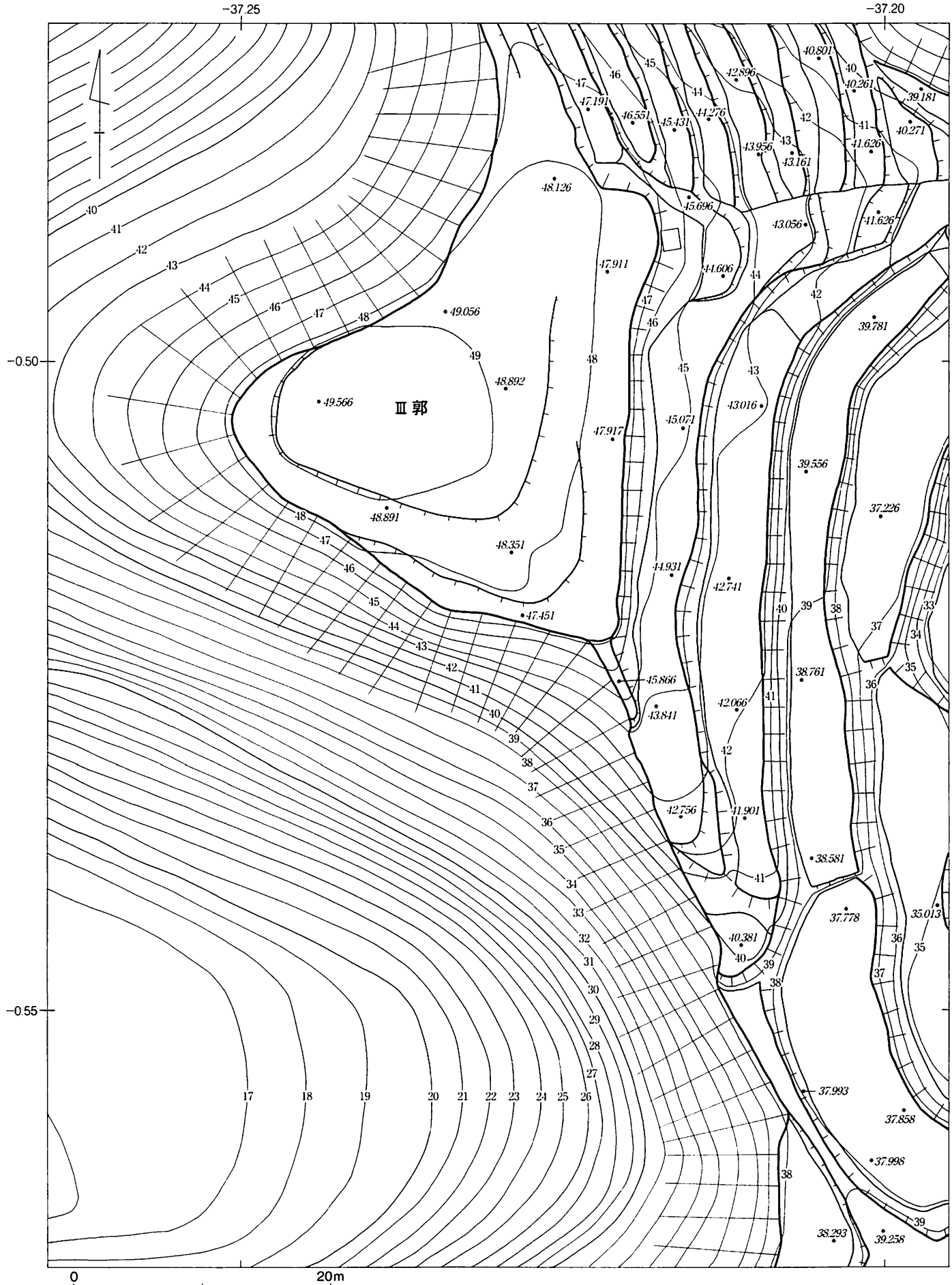
第10図　内田今城跡測量図④



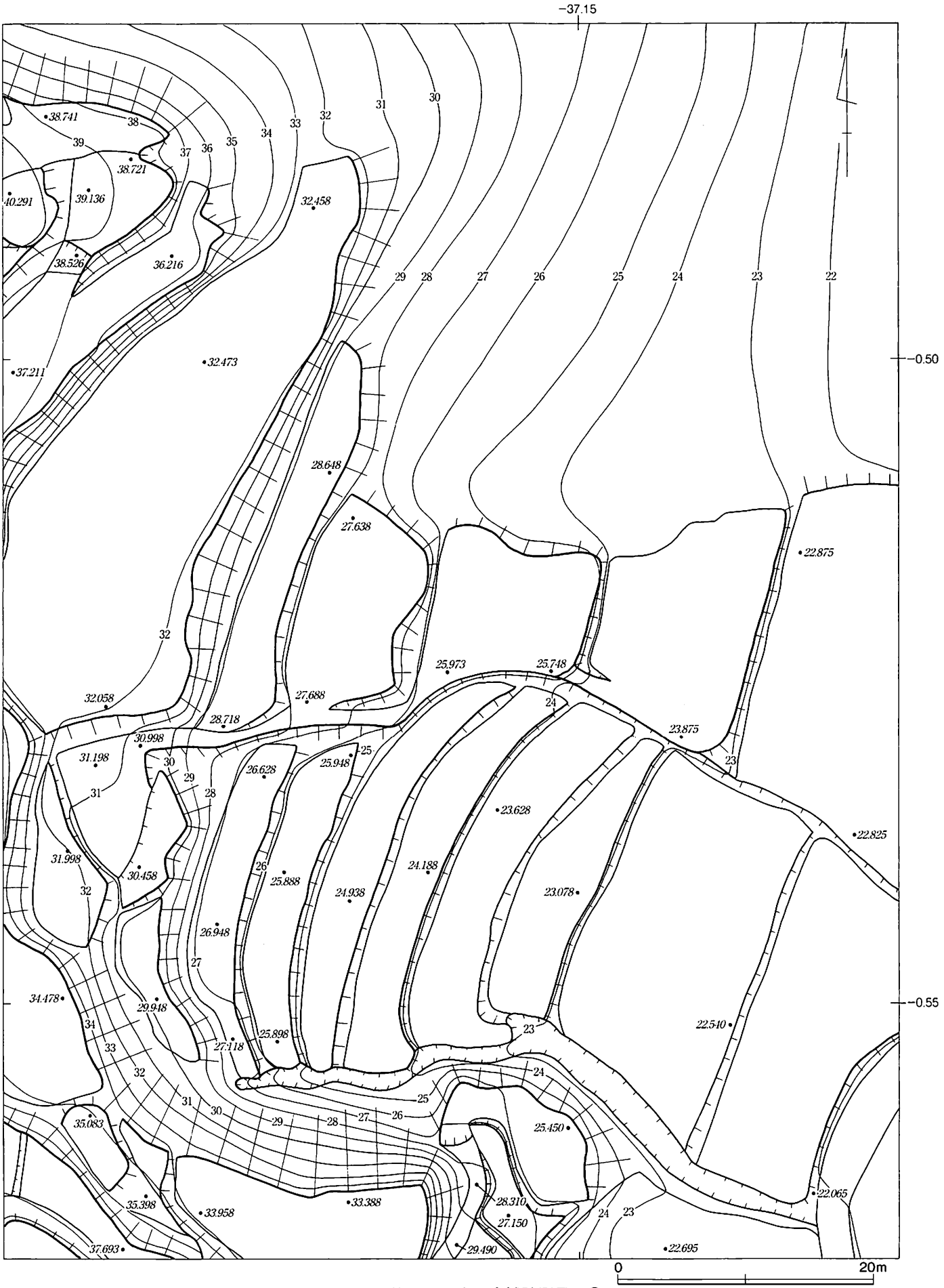
第11図　内田今城跡測量図⑤



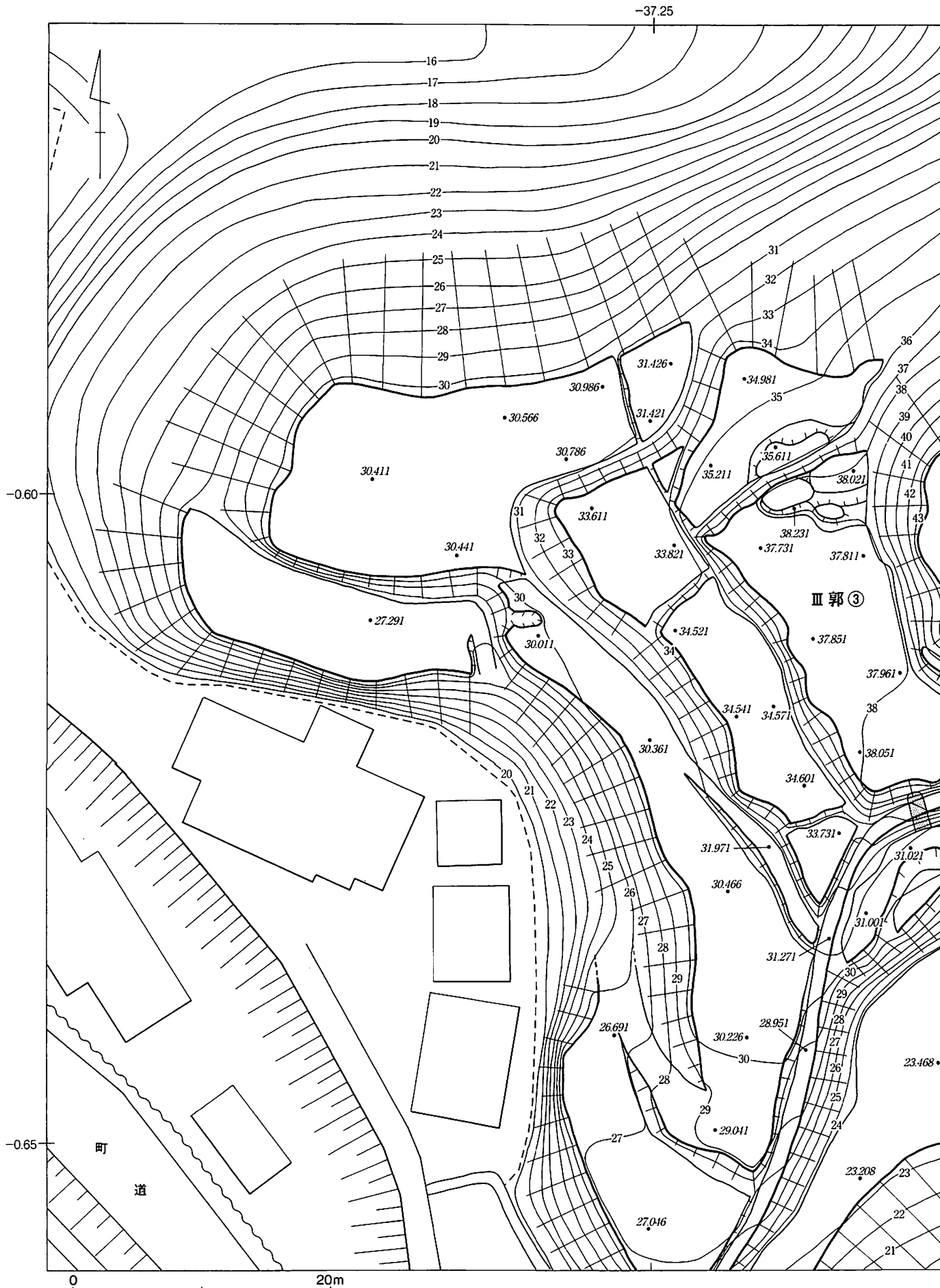
第12図　内田今城跡測量図⑥



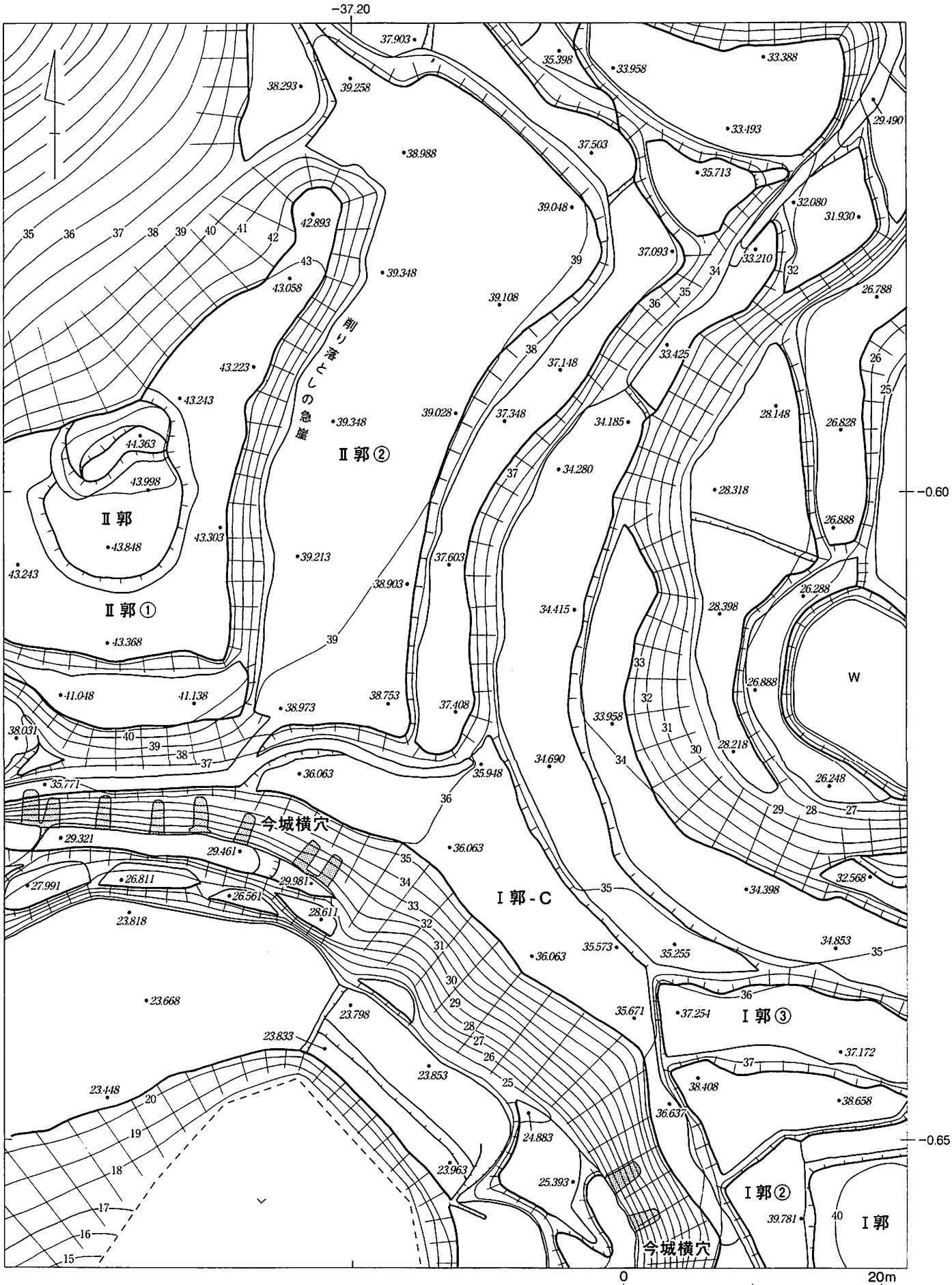
第13図　内田今城跡測量図⑦



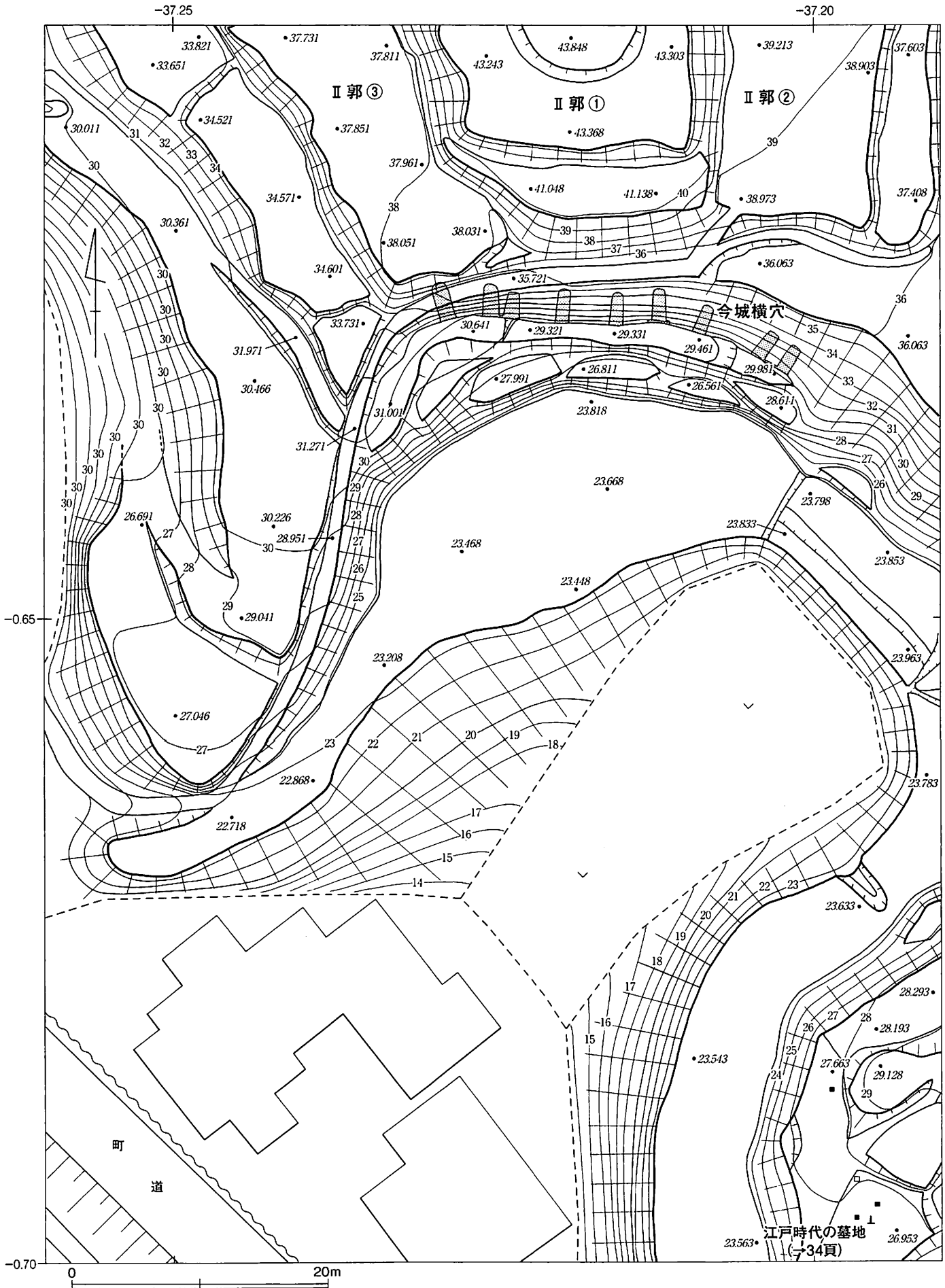
第14図　内田今城跡測量図⑧



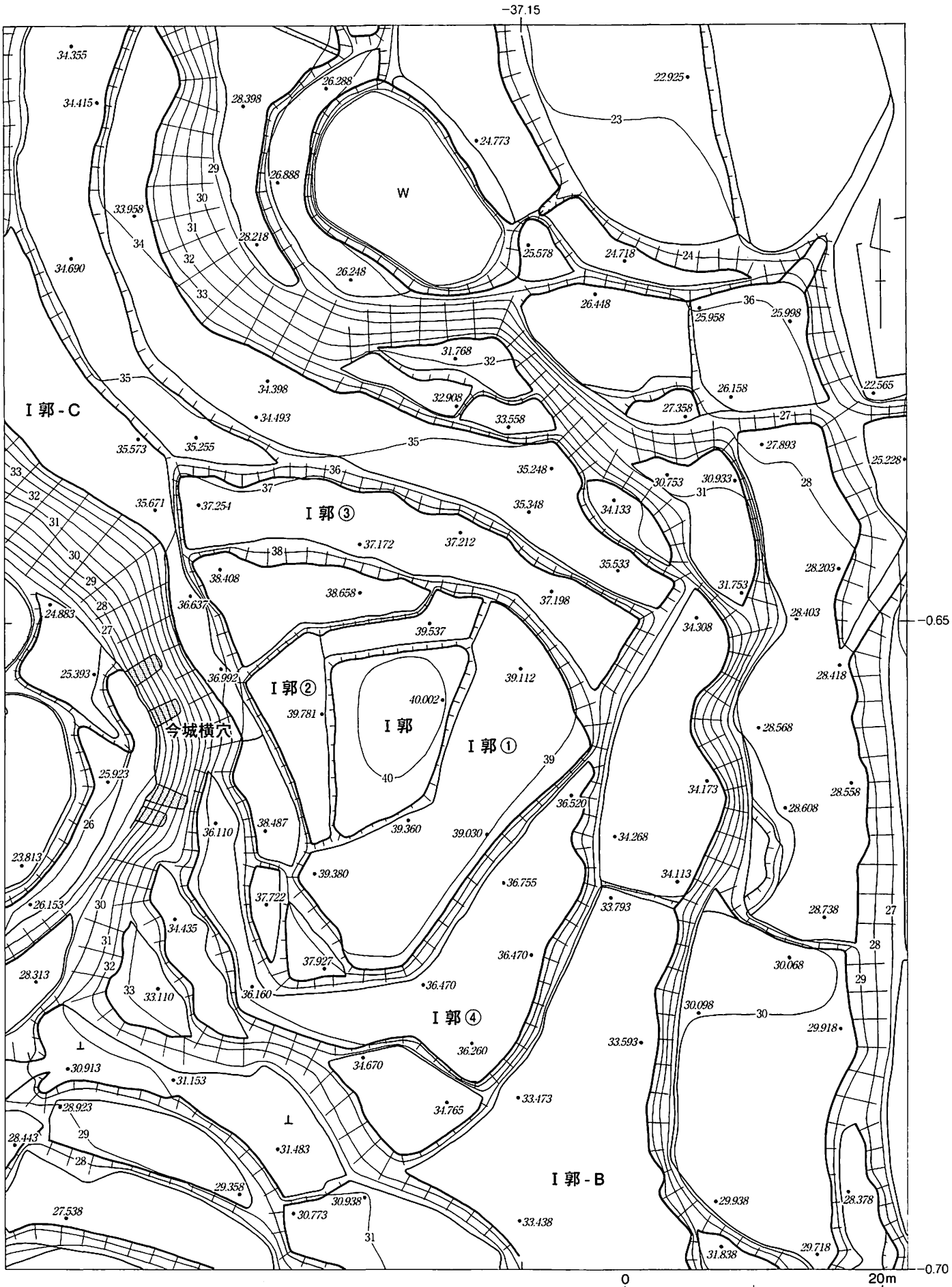
第15図　内田今城跡測量図⑨



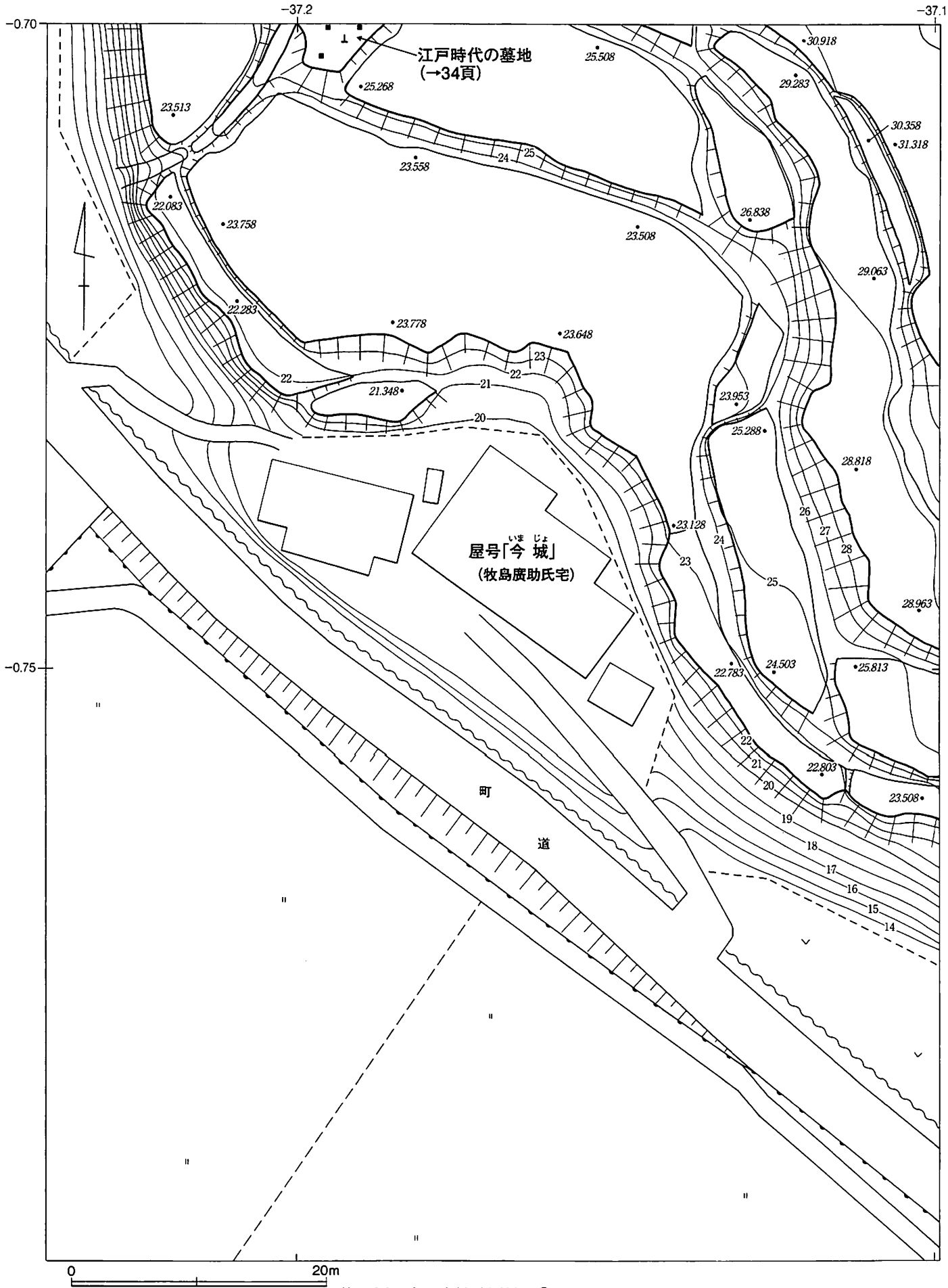
第16図　内田今城跡測量図⑩



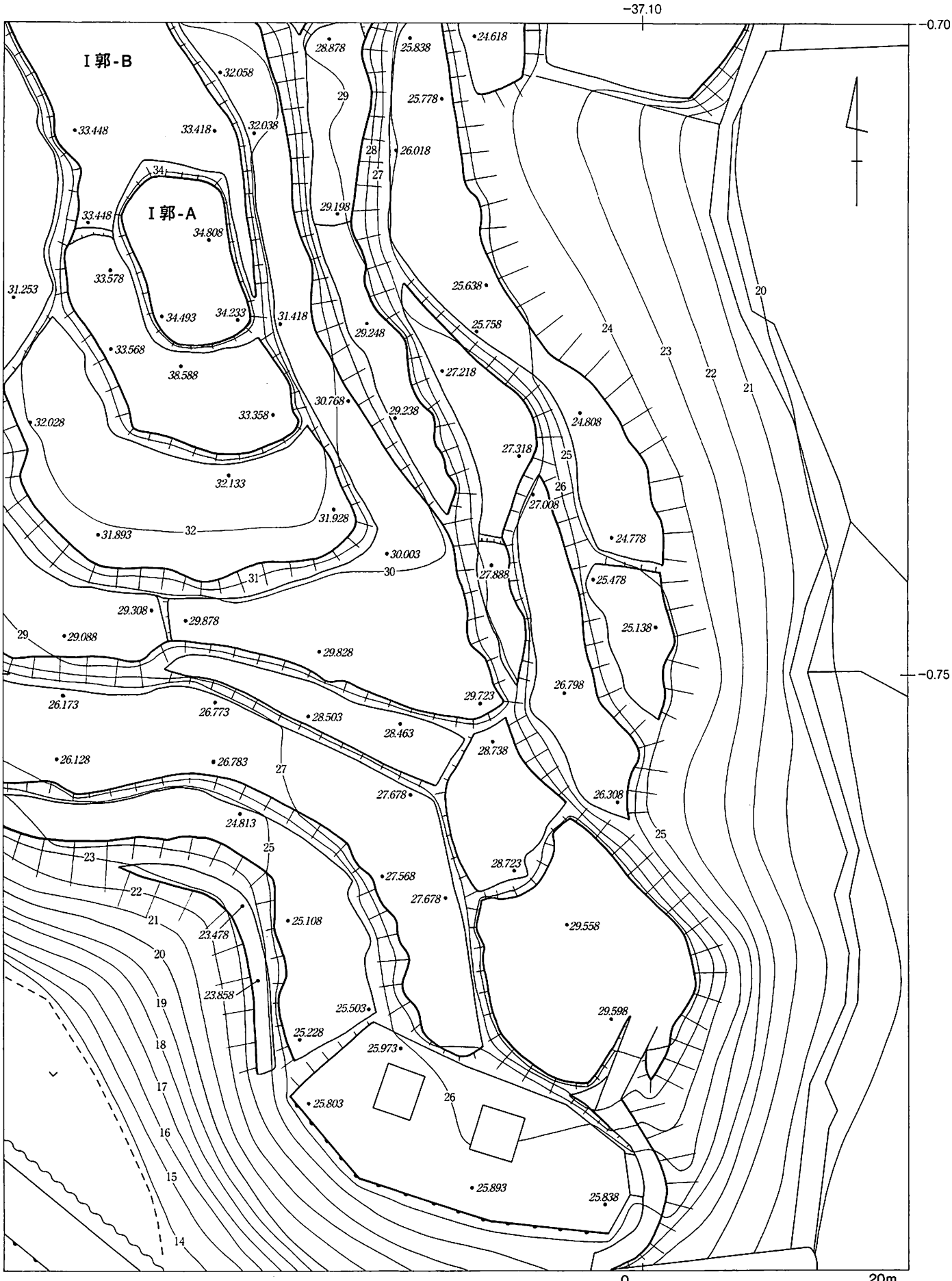
第17図　内田今城跡測量図⑪



第18図　内田今城跡測量図⑫



第19図　内田今城跡測量図⑬



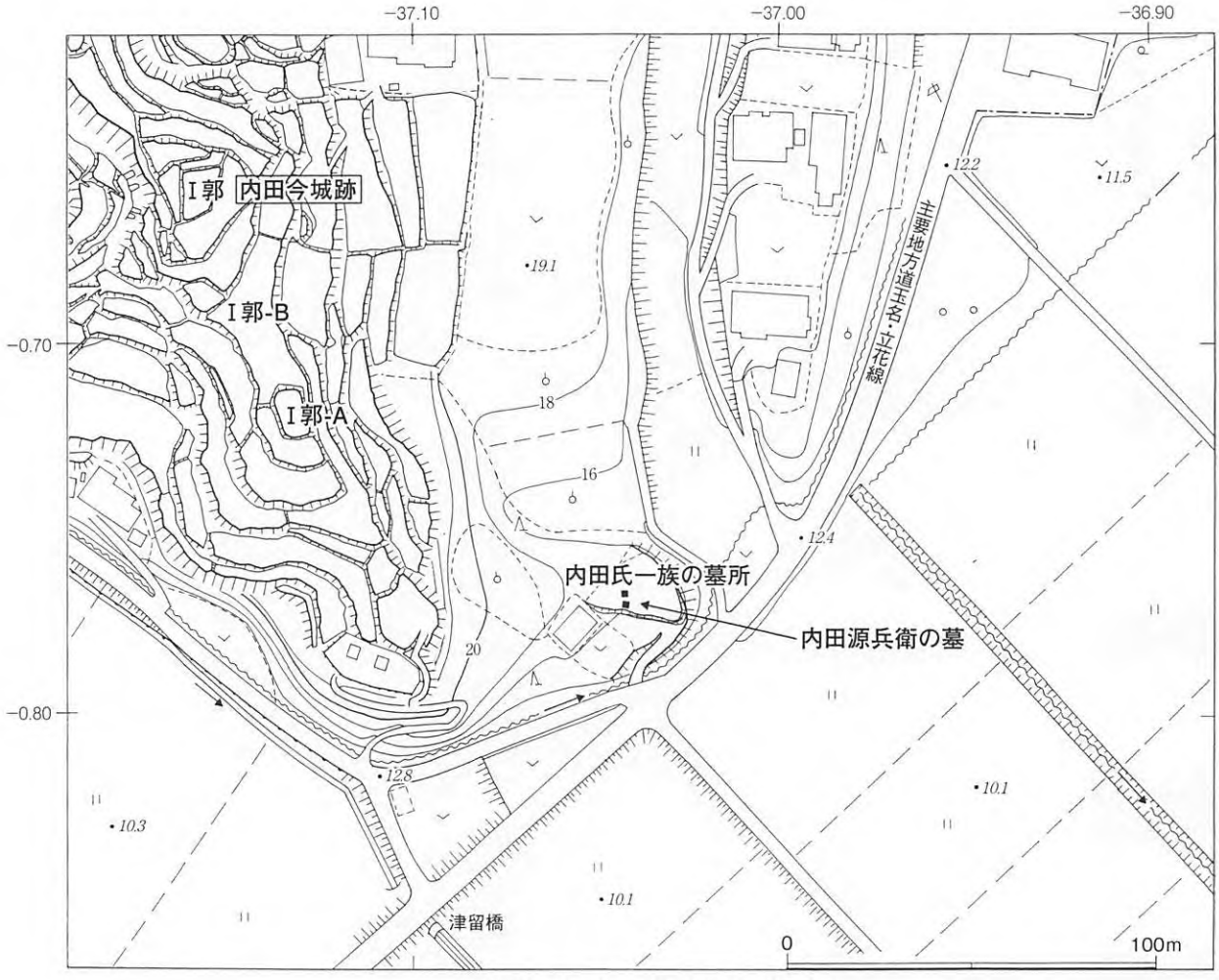
第20図　内田今城跡測量図⑭

第５節　金石文調査

〔内田氏一族の墓所〕

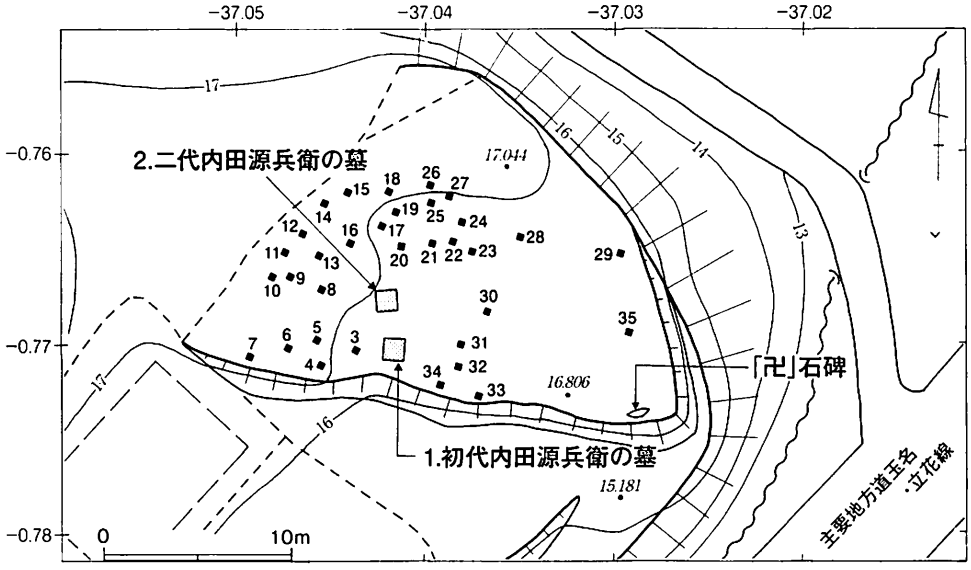
城地の先端下にある江戸時代の墓地に「内田源兵衛君以　寛文五年（1665）十二月二十二日没」「源兵衛君内田古城主胤也」と刻まれた献灯籠がある。慶応元年（1865）の建立で、当時の内田氏一族が、祖先の権威づけのために行ったものと思われる。この類の石碑は、下津原地区の墓地(注)にも見られる。

（注）和水町文化財調査報告　第１集『立石城跡・内田宮山城跡』2006年



第21図　内田氏一族の墓所　位置図

内田氏一族の墓所

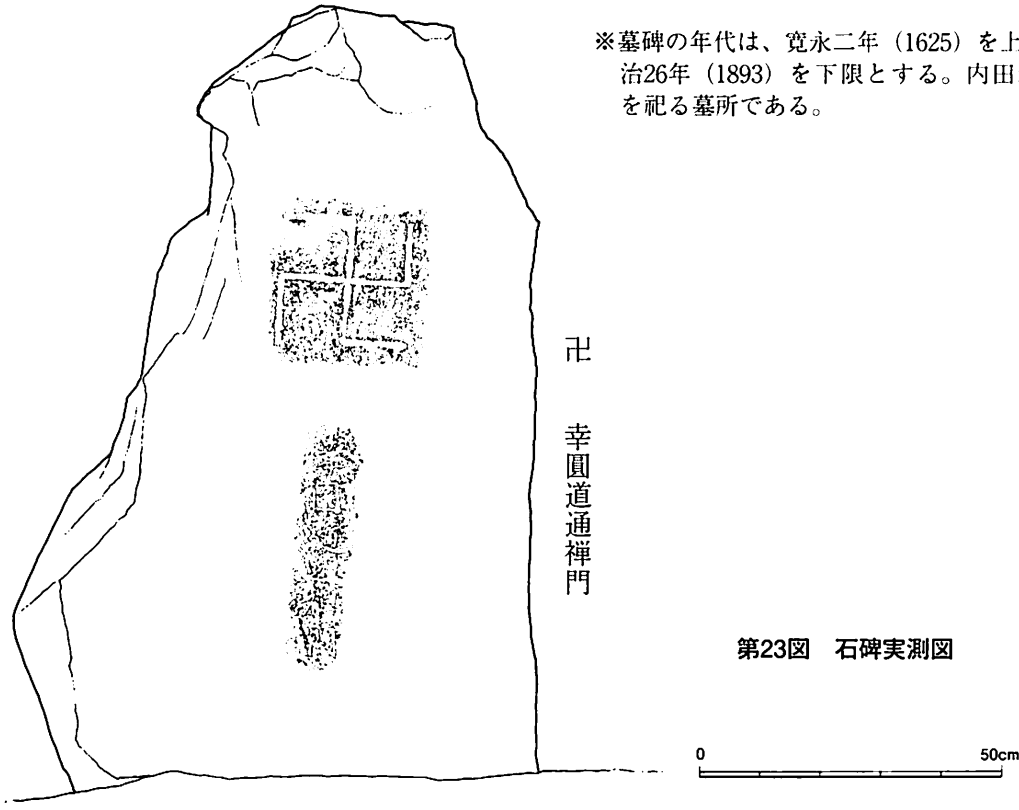


第22図
内田氏一族の墓所

No	墓碑 (元号年月日)	西暦	No	墓碑 (元号年月日)	西暦	No	墓碑 (元号年月日)	西暦
1	寛文五年 十二月二十二日	1665	13	正徳六丙申 五月七日	1716	25	享保二年 十一月二日	1717
2	元禄十五年 八月初7日	1702	14	寛政元年 正月十五日	1786	26	宝永五年 六月四日	1708
3	元禄九丙子 十月廿九日	1696	15	宝永五戊子天 正月三日	1708	27	正徳元年 六月四日	1711
4	延宝八庚申年 五月廿八日	1680	16	不明	—	28	宝永五子年	1708
5	正徳元辛卯年 九月十三日	1711	17	宝暦四戌年 三月九日	1754	29	元禄二年 二月廿三日	1689
6	宝暦九年 四月十三日	1759	18	享保十一丙午年 十月二日	1726	30	元禄十七申暦 正月十一日	1704
7	宝暦九年 四月十五日	1759	19	明和三丙戌年 十月廿三日	1766	31	延宝四年 七月十五日	1676
8	明治六年 八月三十日	1873	20	貞享四卯暦 九月十三日	1687	32	延宝五巳	1677
9	安永九庚子天 十二月二日	1780	21	元禄十六年 十二月九日	1703	33	□□□辰 四月九日	—
10	安永九年 十一月十八日	1780	22	不明	—	34	寛永二年 四月十三日	1625
11	延享三丙寅天 九月九日	1746	23	明和六年己丑天 四月七日	1769	35	明治二十六年 七月二十九日	1893
12	延享二乙丑 五月三日	1745	24	延享四丁卯天 九月廿六日	1747			

内田氏一族の墓碑年号一覧表

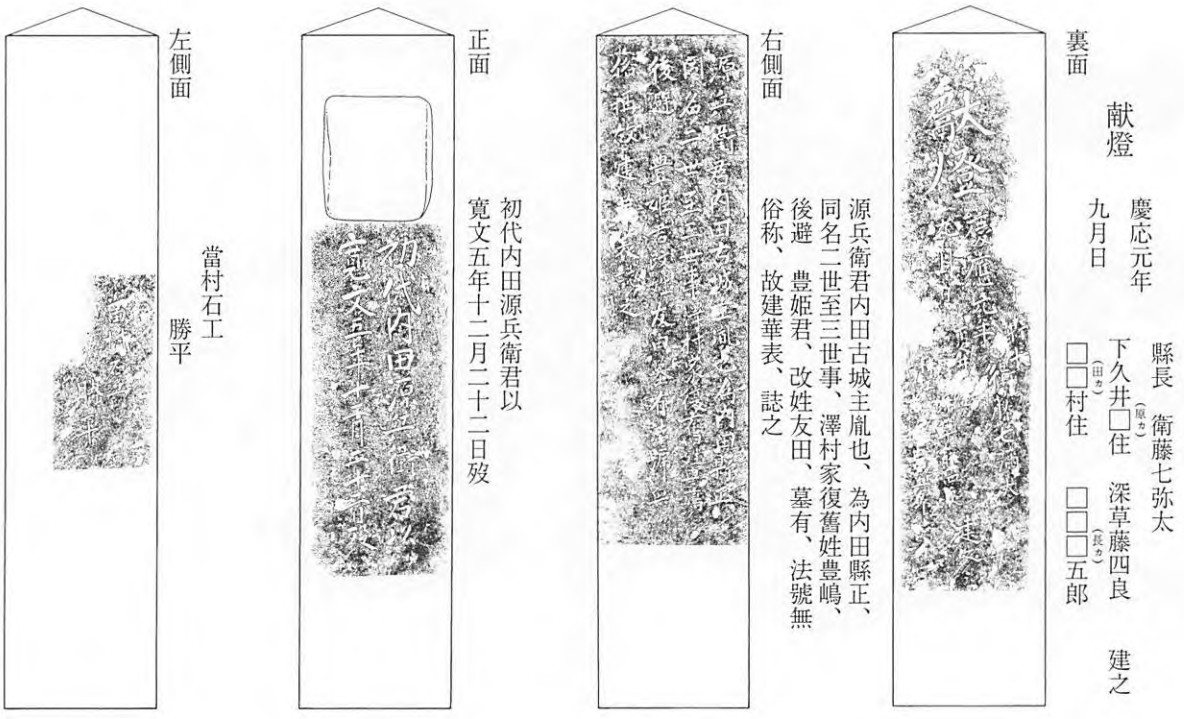
※墓碑の年代は、寛永二年（1625）を上限とし、明治26年（1893）を下限とする。内田地区の先祖を祀る墓所である。



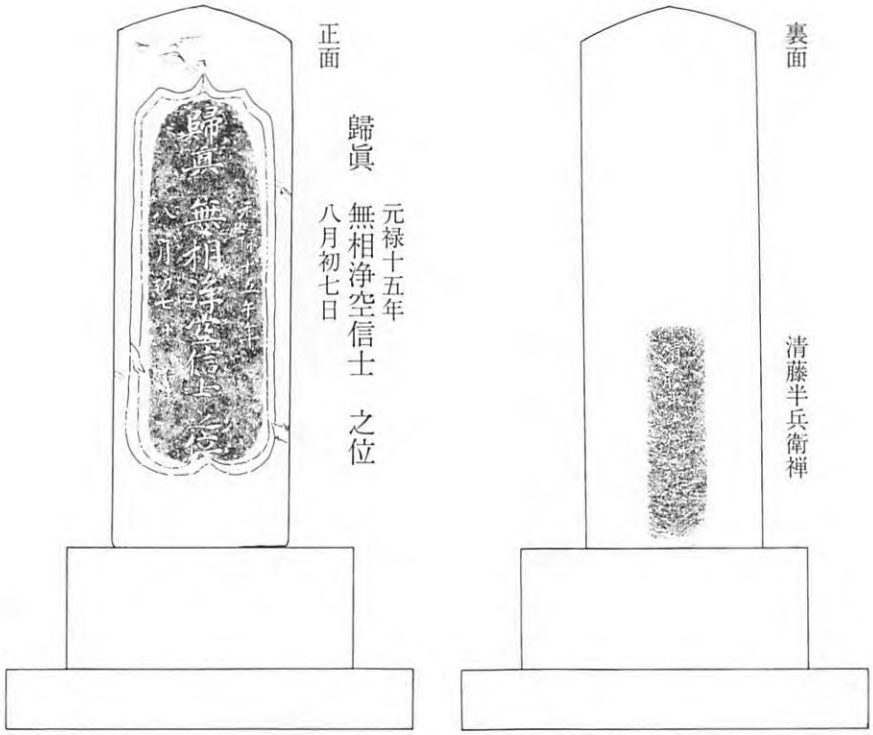
第23図　石碑実測図

※初代内田源兵衛の献灯籠　右側面銘文の大筋は次の通り。
源兵衛君は、内田の古城主の子孫で、内田の県正である。
（以下、余り意味が分からない）二世や三世は、澤村姓や後で豊嶋姓になった。
豊姫君は、友田に姓を改めた。墓は、法帰無（?）にある。そこで、華表を建てて、之を誌す。
※慶応元年（一六六五）九月の献灯に刻まれた内田氏の祖先付けである。

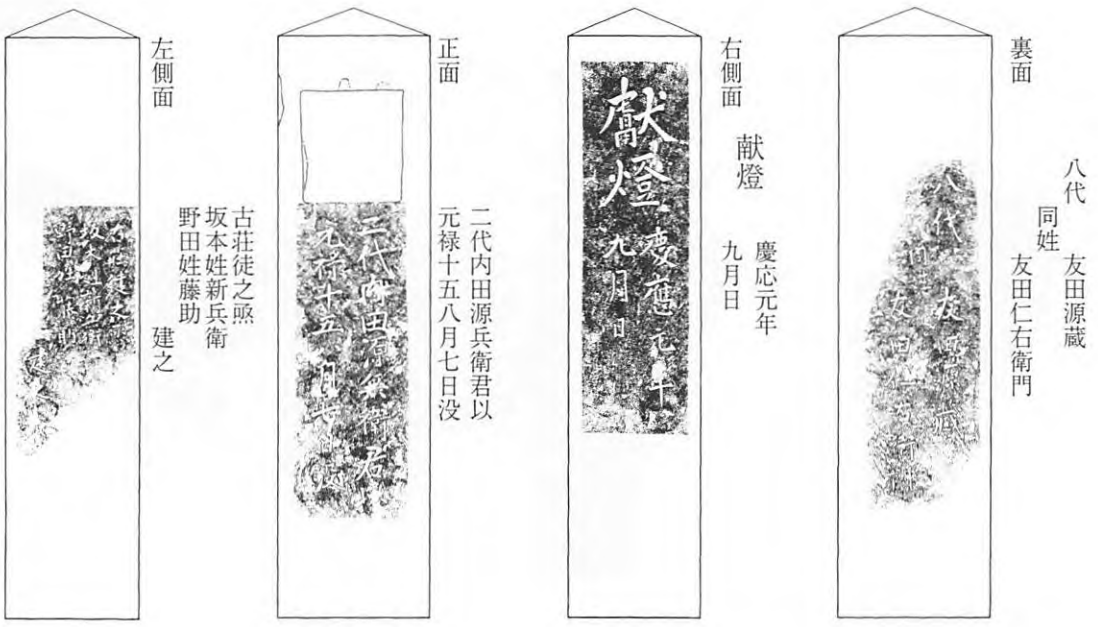
第24図　初代内田源兵衛　墓石実測図



第25図　初代内田源兵衛　献燈籠実測図



第26図　二代内田源兵衛　墓石実測図

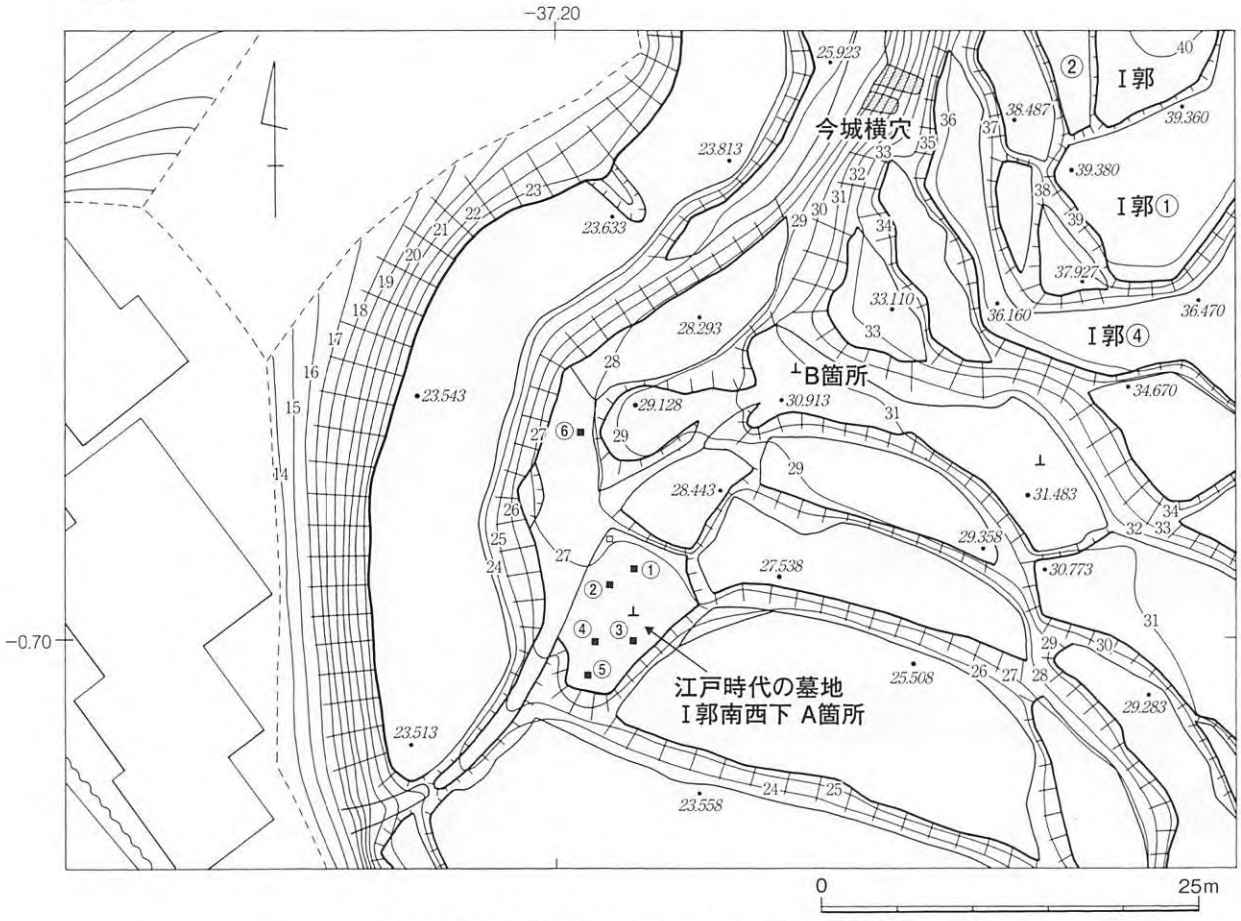


第27図　二代内田源兵衛　献燈籠実測図

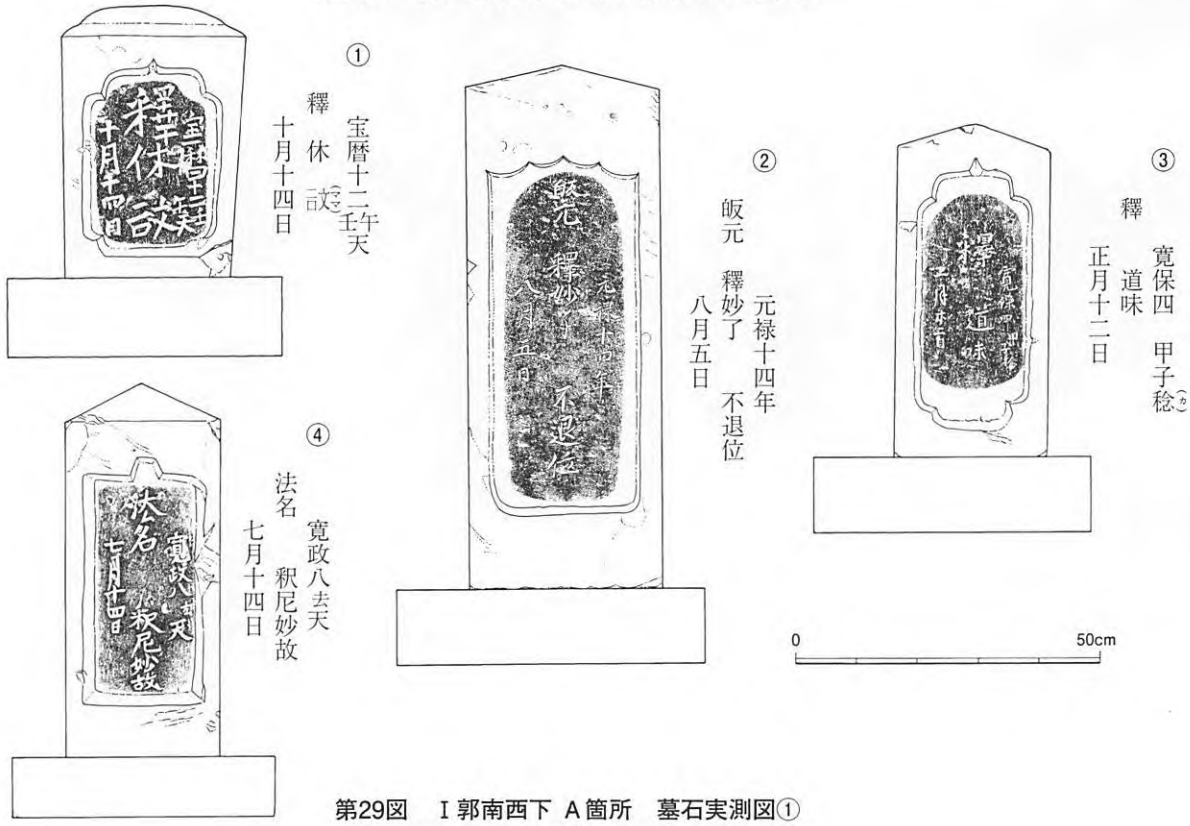
0　50cm

〔江戸時代の墓地　Ⅰ郭南西下〕

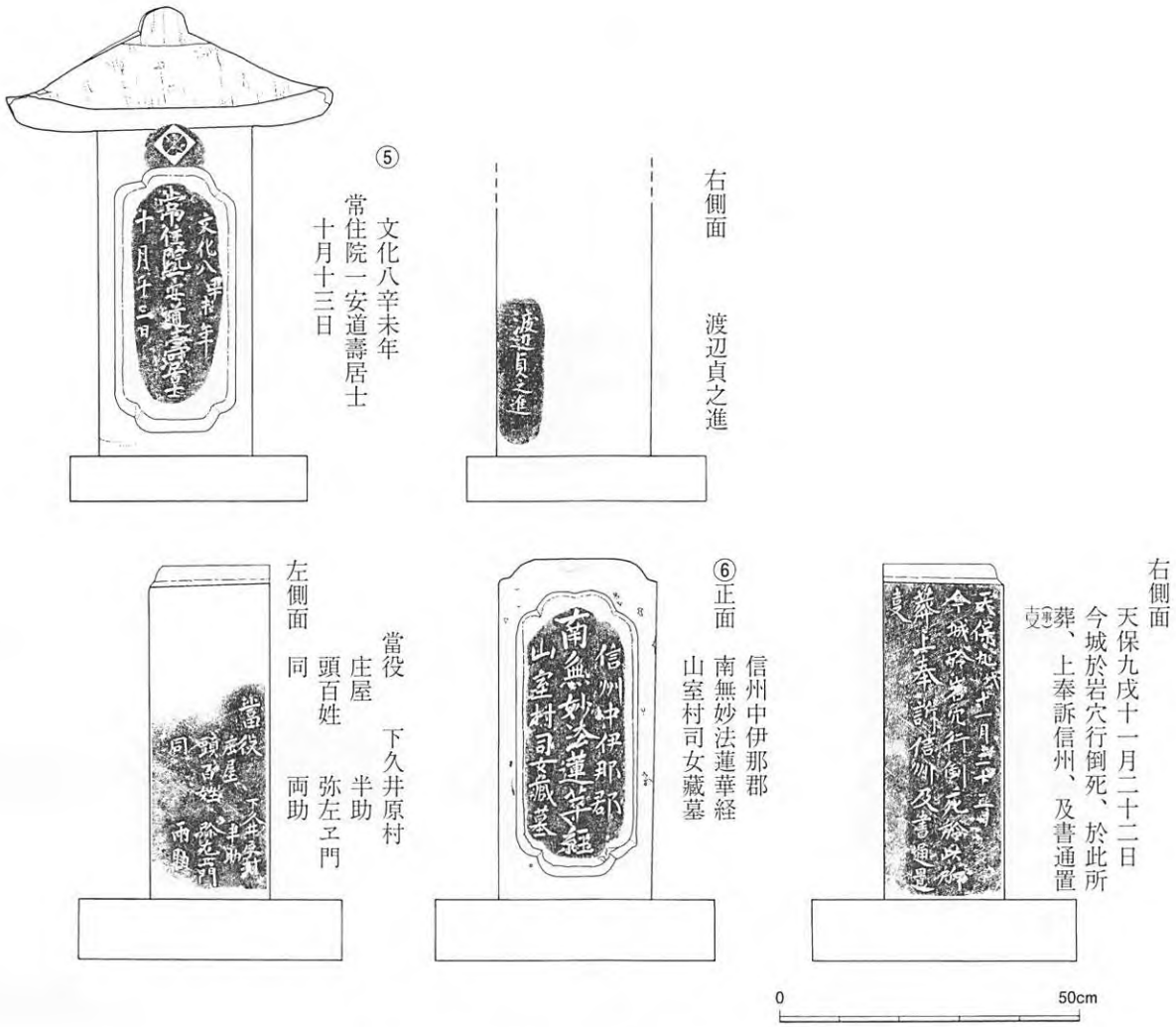
Ⅰ郭南西下にも江戸時代の墓所があり、下段のA箇所を調査した。上段のB箇所の墓碑年号を次頁下表にした。



第28図　江戸時代の墓地〔Ⅰ郭南西下〕位置図



第29図　Ⅰ郭南西下 A箇所　墓石実測図①



第30図　Ⅰ郭南西下 A箇所　墓石実測図②

Ⅰ郭南西下 A箇所　墓碑一覧表

No.	墓碑　(元号年月日)	西暦
①	宝暦十二壬午天　十月十四日	1762
②	元禄十四年　八月五日	1701
③	寛保四　甲子稔　正月十二日	1744
④	寛政八去天　七月十四日	1796
⑤	文化八辛未年　十月十三日	1811
⑥	天保九戌　十一月二十二日	1838

Ⅰ郭南西下 B箇所　墓碑年号表

享保二十年 (1735)	天明元年 (1781)
明和元年 (1764)	天明三年 (1783)
明和五年 (1768)	天明五年 (1785)
明和五年 (1768)	寛政八年 (1796)
明和八年 (1771)	寛政八年 (1796)
安永六年 (1777)	享和元年 (1801)
安永八年 (1779)	文化九年 (1812)

※⑥の墓碑は、非常に特色がある。味わい深い銘文である。右側面銘文の大筋は、次の通り。

> 天保九年（1838）戌の十一月二十二日に今城の岩穴（今城の西側崖面に残る横穴の一つを意味する）で行者が亡くなった。
> そこで、この所（墓地）に埋葬して、この事を、行者の出身地の信州に手紙で連絡した。

※この石碑の銘文は、素人が作成して、石工さんに彫らせたものと推定される。実際、「上奉訴信州」の意味が曖昧である。

※元来、このような行者が旅先で亡くなった時は、埋葬して貰えるだけで幸せである。それが、ここでは、地元の人が、彼の出身地に手紙で連絡した事が分かる。

第Ⅲ章　まとめ

文献に未記載の城地であるが、Ⅰ郭からⅣ郭まで確たる縄張りが残っている。Ⅳ郭の北西側を断ち切る町道は、城時代の堀切が下地になっていると見なしてよい。この城地の特徴は、Ⅳ郭にある。本来は、Ⅲ郭北先の堀切が城域の北限と見なされる。この箇所で、帯状地形が明確に断ち切られているからである。城内と城外を明確に区分する要の遺構で、他の城跡では、大方、この様な堀切を一歩出ると地形が一変して、自然地形が卓越する状態となる。しかし、この城地では、堀切の規模も上場幅が4.0mに留まり、それより北域が城外という状況にない。Ⅰ郭～Ⅲ郭と同様に人工的な地形が広がっている。その上、Ⅳ郭は、端部を堀切を転用したと思われる町道で切られており、縄張りとしてのまとまりがある。少なくとも、捨て曲輪の役目を果たした区画であると見なしてよい。結果として、全長600mに及ぶ帯状の縄張り図となった。今回の測量は、城地を広範囲に捉える試みでもあったので、大きな成果を得たと確信している。

既刊の『菊水町史』でも取り上げたが、県内533の中世城跡の中で、確かに、小村のセンター的な城跡は存在する。通史編の中で、この内田今城も、その部類に入れている。平時は、領民の精神的な拠り所で、極めて生活密着型の城である。城と麓集落が一体化した「総構えの城」となる。しかし、そうは言っても、城は、あくまでも戦の副産物である。有事の際は、城地での白兵戦が必至となる。そのため、外縁地区の捨て曲輪が無視できない。逃げ道の確保の意味も持っている。町内では、町史編纂時に、唯一、焼米城跡で、この類の間道を確認できた。この城跡でも、間道の端部に堀切が刻まれていた。したがって、この城地の場合は「間道＝Ⅳ郭」と見なしてよい。多くの城地では、この捨て曲輪の範囲が把握できていない。内田今城では、幸いにも縄張りが良く残っていた。

〔全体の縄張り〕

今城と呼ばれるⅠ郭は、明らかに城地の中心部である。後世の造成部分を差し引いても、基本的な縄張りは、あまり変化していないと思われる。城地はⅠ郭を中心にして、東側の集落を向いていたものと思われる。ただし、この郭だけで、城地の縄張りは構成できない。やはりⅡ郭とⅢ郭と堀切の存在が必要で、これにⅣ郭が加わる事で、防禦施設が完成する。城地で面的な広がりは不可欠である。それでも、この類の城地は、後世の造成による畑地と遺構との見極めが非常に困難である。中世城跡の研究において大きな壁になっている。それでも、下益城郡美里町に所在する堅志田城跡（国指定史跡）では、一見すれば畑地跡のように見える数多い削平地と小段群の中に「倉御殿」「舞ノ御殿」「味噌御殿」の地名が残っていた貴重な事例である(注)。これらの事例があるので、いかなる場合でも、城地では入念な地形測量調査が求められる。それは、縄張りを考察する上で不可欠な作業である。

（注）美里町文化財調査報告　第３集『堅志田城跡ⅩⅣ』2008年

〔近隣の城跡との関係〕

Ⅰ郭西下の丘陵縁からは、北西方向に内田宮山城跡が間近に望める。実に0.48kmの近距離である。さらに、城地から見えないが、南西方向の1.4km先にも菊池川流域に和仁石山城跡が位置する。結果として、内田地区には三城跡が存在することになる。同時代に併存した確証はないが、興味深い。なお、本来、内田氏が支配した内田の地は、戦国時代後半に、佐賀の龍造寺氏の勢力下におかれた史実がある。この歴史的背景も考慮に入れて三城跡を考えるべきであろう。

〔資料〕 内田地区のお祭りについて

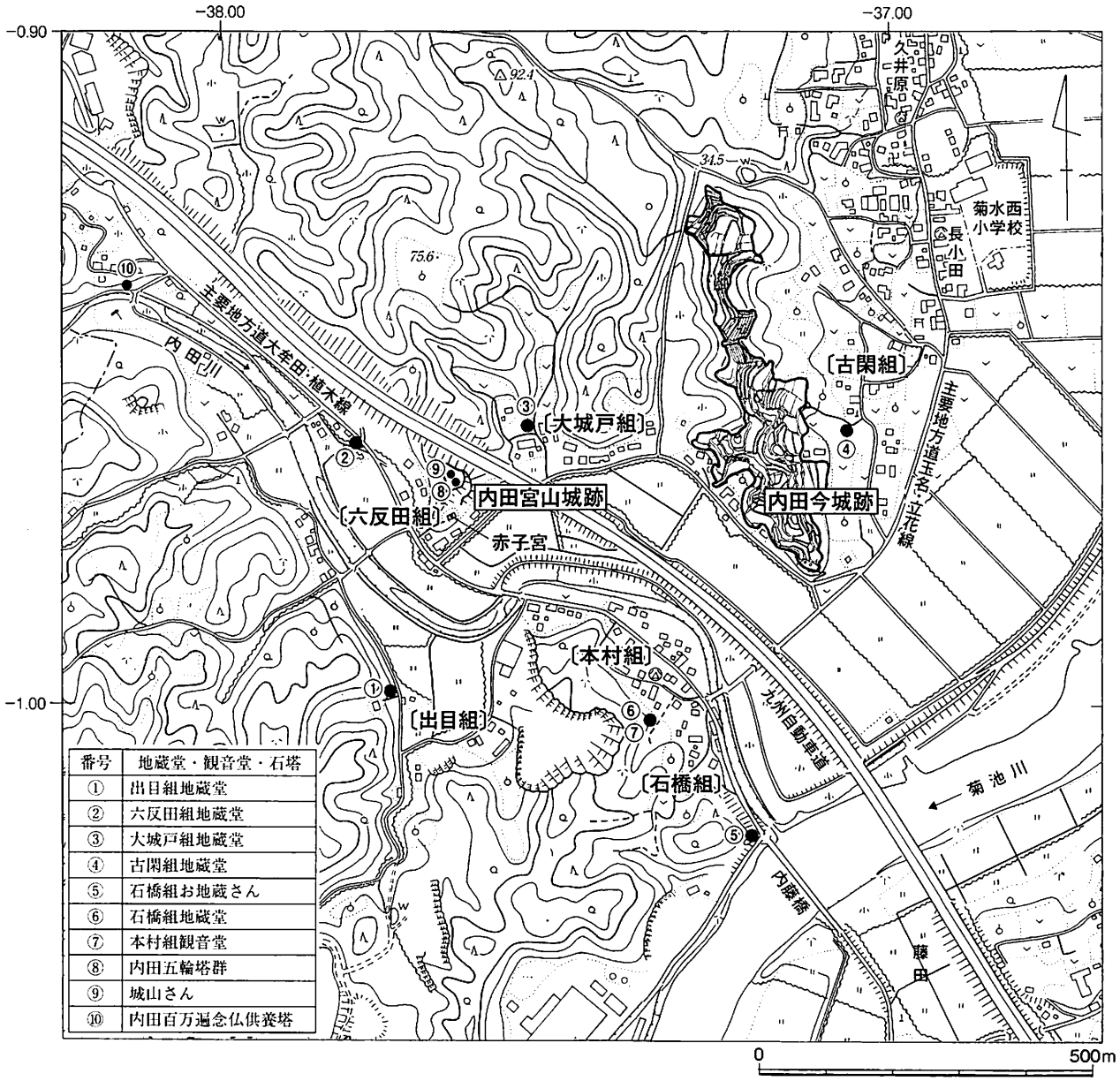
和水町総合教育課文化係参事　居石裕臣

内田地区の、地蔵さん祭りや観音さん祭りなどについて紹介する。

内田地区には、六つの組があり、それぞれ「お地蔵さん」や「お観音さん」をお祀りしている。古くは1月18日がお観音さん祭り、1月24日がお地蔵さん祭りの日としているが、今日、組によってお祭りの日を休日に変更しているところもある。昔は男性によりお祭りが行われていたが、現在は女性で行われることが多い。

1．お地蔵さん祭り

出目組・六反田組・大城戸組・古閑組・石橋組で行われている。各組でのお祭りの様子を紹介する。



番号	地蔵堂・観音堂・石塔
①	出目組地蔵堂
②	六反田組地蔵堂
③	大城戸組地蔵堂
④	古閑組地蔵堂
⑤	石橋組お地蔵さん
⑥	石橋組地蔵堂
⑦	本村組観音堂
⑧	内田五輪塔群
⑨	城山さん
⑩	内田百万遍念仏供養塔

第31図　内田地区地蔵堂　位置図

〔出目組〕 所在地：第31図 ①

現在、その年の都合の良い日にお祭りをしている。出目組12戸で行われており、座元は輪番制である。当日は、組の女性が集まって食事をとりながらお祭りを行う。

お地蔵さんは、お堂に２体がお祀りしてある。内田地区在住の西川一人氏によると「お地蔵さんは、かつて九郎丸地区の山砂採取場にお祀りされていた。昭和５年頃、お堂の建築の資金作りのために芝居を呼んだ」ということである。その当時から、この地区の人達により大切にお祀りされていたことがわかる。

また、この組には個人でお祀りしている「子育て地蔵さん」もある。子供を抱いたお地蔵さんで、乳の出があまりよくない御婦人がお願いすると乳の出がよくなると言われている(注)。(注)『菊水町史』資料編 第９編 地史

出目組地蔵堂

お地蔵さん

〔六反田組〕 所在地：第31図 ②

１月24日が日曜日に該当しない場合は、直前の日曜日にお祭りをしている。六反田組20戸で行われており、座元は輪番制である。当日は、朝から座元が地蔵堂にお酒とご飯をお供えして、各自、お参りをする。その後、場所を移し、お供えしたお酒とご飯や食事をとりながらお祭りを行う。

「寛政六年二月　六反田中　石工彦左衛門作」の文字が刻まれた石祠に鎮座されているお地蔵さんで、像高は60cmである。寄付により、平成13年12月にお堂が建て直された。毎月１回、お花を供え、掃除を行っている。

六反田組地蔵堂

お地蔵さん

〔大城戸組〕 所在地：第31図 ③

現在、その年の都合の良い日にお祭りをしている。大城戸組16戸で行われており、当日は、朝から座元が地蔵堂にお酒とご飯をお供えして、各自、お参りをする。その後、場所を移し、お供えしたお酒とご飯や食事をとりながらお祭りを行う。掃除は毎月１日・15日・24日。

大城戸組のお地蔵さんだけが木像で、他組のお地蔵さんは石像である。お地蔵さんは、像高21cm（江戸時

代初期の作）と総高26cm（近代の作）の二体が祀られている。

平成17年９月５日にお堂が新しく建て直されており、明治44年２月にお堂が建立されたことを示す棟札も現存している。お堂の近くでは、水がこんこんと湧き出ている。

大城戸組地蔵堂

お地蔵さん

〔古閑組〕　所在地：第31図④

毎年１月24日に、古閑組17戸でお祭りをしている。当日の朝、お地蔵さんにお参りし、その後、地区の公民館で食事をとりながらお祭りを行う。座元の家からは、ぜんざいと豆腐汁が振舞われる。座元は輪番制である。毎月１回掃除が行われる。近くの子供達は、毎朝、お参りして学校に通っている。

このお地蔵さんは、総高135cmで、江戸時代（寛政頃）の建立と考えられる。「慶応元年　乙丑十一月十四日　古閑組中」の銘文を持つ石塔と、銘文が伺い知れない石塔が並んで建っている。

以前は、主要地方道玉名・立花線（県道６号）の道沿いに建っていたが、県道の道路改良に伴い現在地に移った。移転する前はお堂もなく、雨の日は蓑笠を、夏の暑い日は三度笠を被られていた。移転の際、お地蔵さんは、石で出来ているとは思えないほど軽く感じたそうである。お地蔵さんも、お堂が建てられ、その中に祀られることを喜んでいたという話が残っている。

お堂の完成とお地蔵さんの移転を祝して餅投げが行われた。また、旧居石孝至氏宅前の田で、劇団を呼んで皆でお祝いした。芝居は４～５日行われた。

古閑組地蔵堂

お地蔵さん

〔石橋組〕

１月24日が日曜日に該当しない場合は、直前の日曜日にお祭りをしている。石橋組10戸で行われており、座元は輪番制である。当日は、お地蔵さんにお参りをし、場所を移して食事をとりながらお祭りを行う。昔は、料理を持ち寄ってお堂でお祭りをしていた。お地蔵さんの胸当ては毎年交換する事と、正月にはお鏡を供えることが慣わしである。この組には２体のお地蔵さんがあり、別々の場所に祀られている。

１体（所在地：第31図 ⑤）は、菊池川に架かる内藤橋の傍（主要地方道大牟田・植木線と主要地方道玉名・立花線の交わるところ）に建立されている。「天保六年　奉寄進　石場志　若者中」と「寛政四年子ノ十二月　片野　水ヶ谷」の銘文を刻む２つの石塔、風化し銘文が読み取れない笠石がある。

このお地蔵さんは、斉木憲輔氏宅の前から現在地に移転された。いつ頃、どのような理由で移転したかは、不明である。斉木氏によると「お地蔵さんが、喉が渇いたため近くに水が飲めるところはないかと、村人に尋ねたところ、その村人は水が湧き出ているところを教え、案内したそうである。その水のあまりの美味しさにお地蔵さんは感激され、お礼にと言ってお地蔵さん自ら手で砂を掘り起こされたそうである。するとこれまで以上にこんこんと水が沸き出た」という言い伝えが残っている。その箇所が「水ヶ谷」とされ、斉木氏の自宅前である。

内藤橋傍らのお地蔵さん

石橋組お地蔵さん

もう１体（所在地：第31図 ⑥）は、本村組のお観音さんと同じお堂にお祀りされている。掃除は、月１回は必ず行っている。

石橋組お地蔵さん参り

石橋組お地蔵さん

２．お観音さん祭り

〔本村組〕　所在地：第31図 ⑦

内田地区のお観音さん祭りは、この組だけである。石橋組のお地蔵さんも同じお堂に祭られている。

毎年１月18日に、本村組14戸でお祭りをしている。当日の朝、座元の家から重箱に詰めたご飯とお酒をお供えし、各自、お観音さんにお参りをする。午後から地区の公民館でお供えしたご飯とお酒や弁当で食事をとりながらお祭りを行う。座元から豆腐汁が振舞われる。座元は輪番制である。

このお観音さんは、もともと組内の家々を回ってお祀りされていたが、後に石橋組のお地蔵さんのお堂に

合祀された。その理由は不明である。また、55年前ぐらいは男性でお観音さん祭りを行っていたということである。日頃の掃除は、毎月18日に近い日で座元が都合のいい日に行っている。石橋組と本村組では別々に行われている。お堂の修理などは本村組と石橋組で行い、費用を分担している。

石橋組・本村組　お堂

本村組観音さん

3．その他のお祭り

〔塔さん祭り〕　所在地：第31図 ⑧

内田五輪塔群をお祀りしている。お祭りの日は４月10日であるが、現在は直前の日曜日に行われている。大城戸組16戸で行われており、座元は輪番制である。「塔さん祭り」の座元、前述した「お地蔵さん祭り」の座元、「赤子宮の宮籠りの供飯（ごくさん）上げ」を同じ家で行う。

当日は、朝から座元と組の評議員とでご飯とお酒をお供えし、お参りをする。その後、座元の家でお供えしたお酒とご飯や弁当で食事をとりながらお祭りを行う。座元から汁物等の１品を添えることが慣わしである。掃除は盆と正月と祭りの前に行い、黒木の木を供える。

〔城山さん〕　所在地：第31図 ⑨

内田宮山城の主郭部分にお祀りされている。祭りの日は４月３日であるが、現在は直前の日曜日に行われている。六反田組20戸で行われており、座元は輪番制である。掃除は、毎月１日・15日と決まっていたが、現在は月１回の掃除と榊の木を供えている。当日は、座元と組の評議員でお神酒と供飯をお供えし、お参りをする。その後、座元の家でお供えしたお神酒や供飯と弁当で食事をとりながらお祭りを行う。座元から汁物などの１品を添えることと、正月にはお鏡をお供えすることが慣わしである。昔は、祠の下に錆びた短刀があったが、現在は行方がわからなくなっている。

内田五輪塔群（塔さん祭り）

内田宮山城跡　主郭（城山さん）

〔井手の神さん〕 所在地：第31図 ⑩

内田百万遍念仏供養塔を「井手の神さん」としてお祭りしている。塔の名前からわかる様に、学術的にみるこの塔の本来の目的と、地域で伝承していく過程で「井手の神さん」という異なる役割を担うようになったと考えられる。

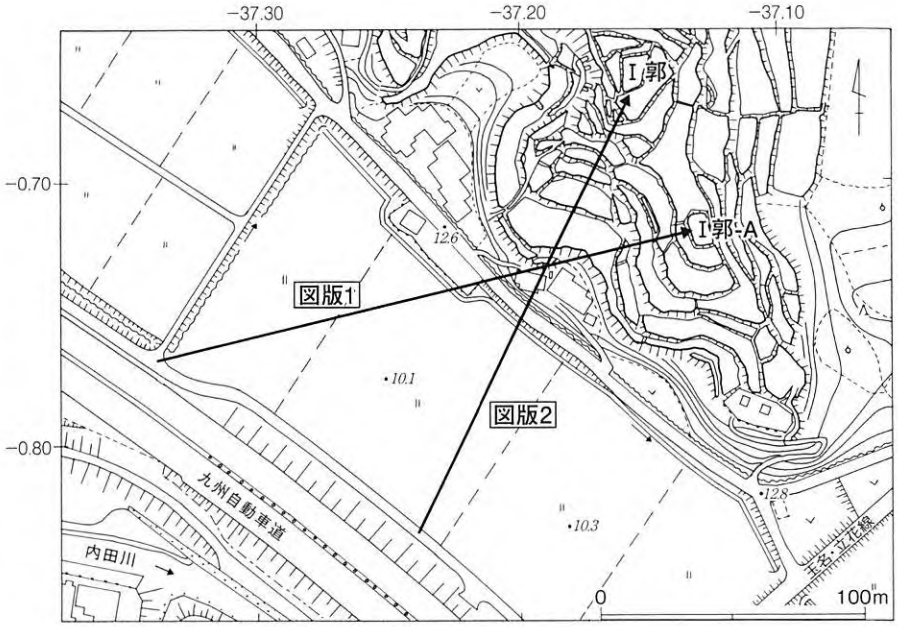
井手の神さんのお祭りの日は２月15日であるが、現在は直前の日曜日に行われている。六反田組20戸で行われており、座元は輪番制である。当日は、前述の城山さんと同じ内容でお祭りをする。掃除は、毎月１日・15日に行い、榊の木をお供えする。

このお祭りは、「供養塔」が「井手の神さん」としてお祀りされているため、紹介すべきか考えたが、現在、行われているお祭りを紹介するという趣旨に基づき、今回、紹介した。また、いつ頃から井手の神さんとしてお祀りするようになったのかを調査したが、昔から行っていると言う事で、詳しくはわからなかった。

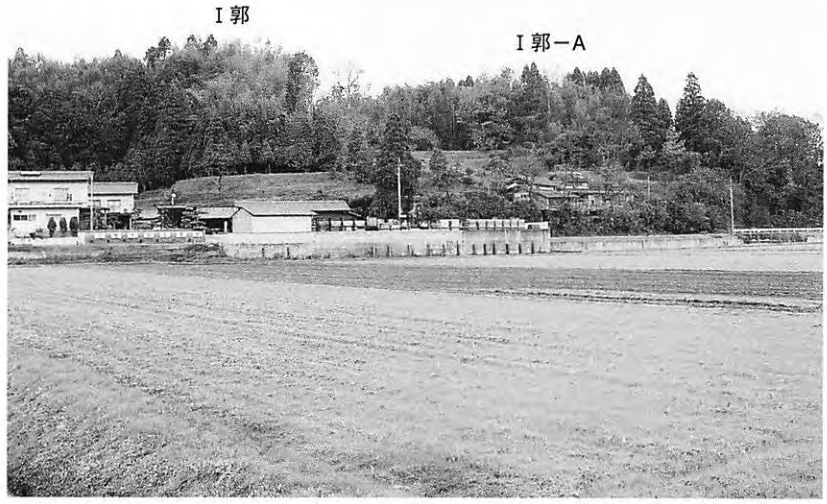
現在に伝わる行事や慣わしが長い年月をかけて少しずつ変化していくのは、当然のことであるが、目的を変えても伝承が伝わっていることが本当に正しいのか、そうでないかは、人によるものと判断している。

この例ばかりでなく内田地区のみならず他の地区でも、本来のお祭りの意味や慣わしがずいぶんと失われていると思う。ただ昔からお祀りしているからなどといった話をよく耳にする。せめて10年前に地区の老人の方々への聞き取り調査ができていれば、もっと詳しく紹介できたものもあったと思う。地元の古老などの聞き取り調査を含め、伝説や言い伝えなどの再調査の必要性を感じている。

写　真　図　版

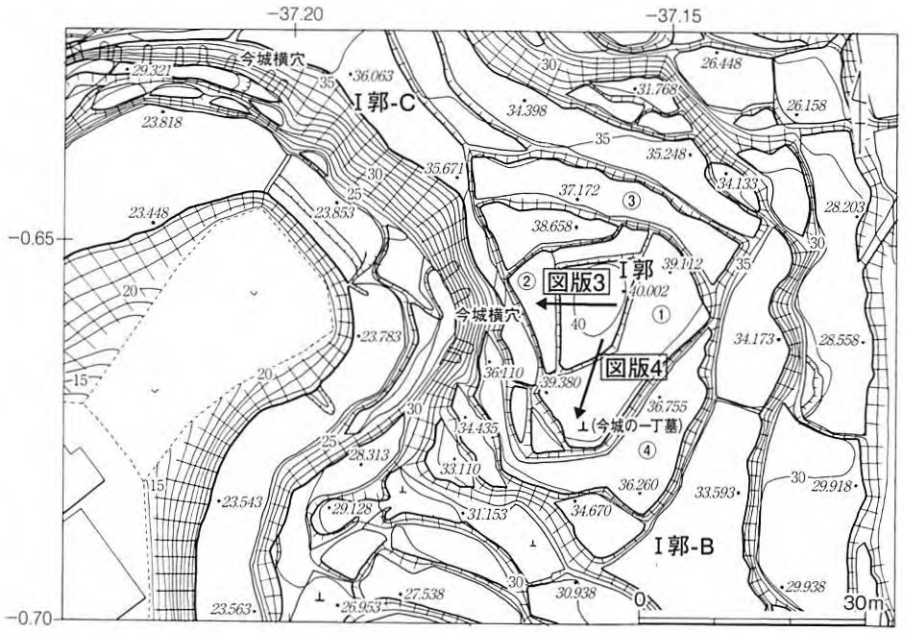


写真撮影位置図①



図版１
内田今城跡　遠景
（南西方向から）

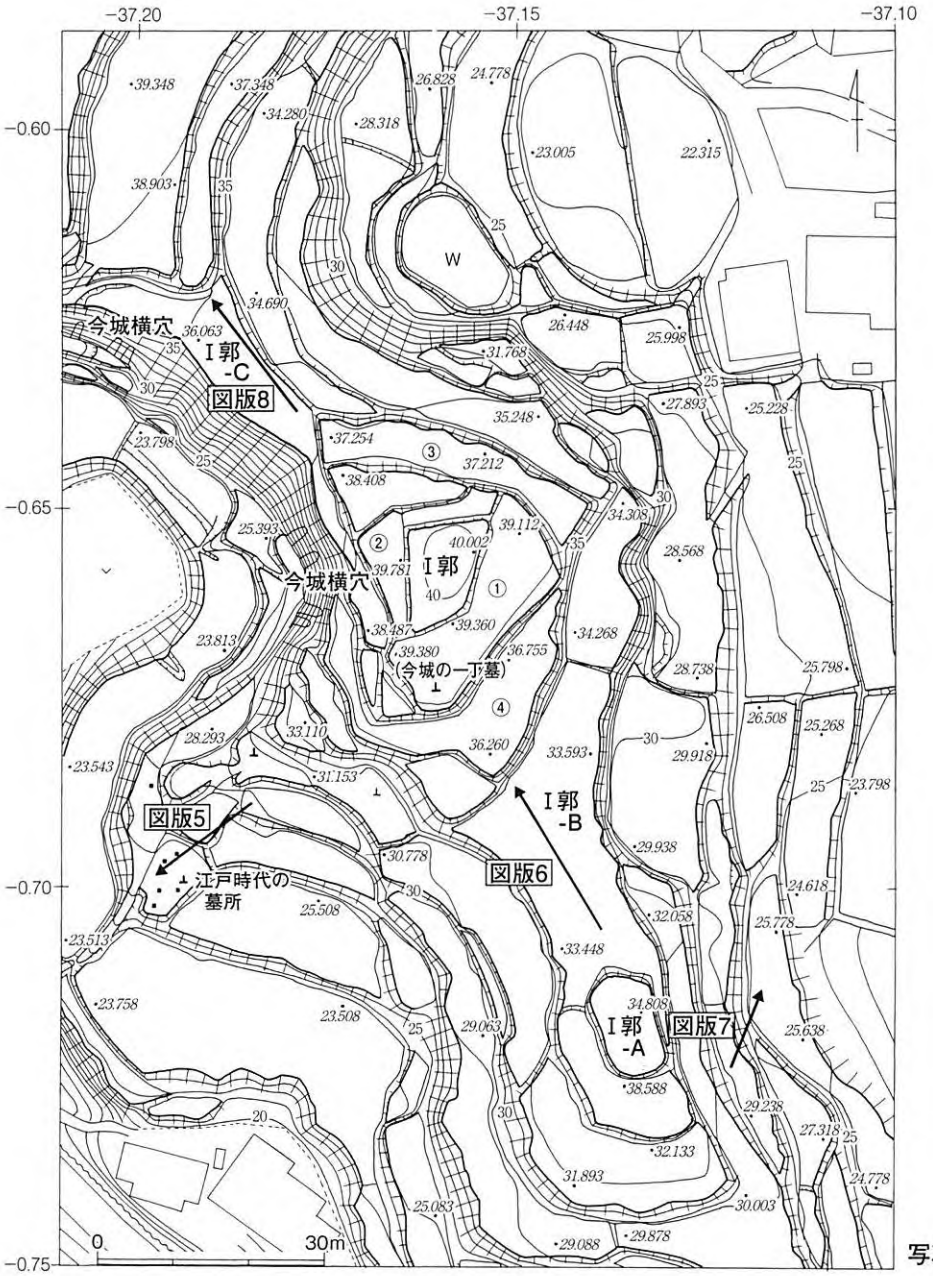
図版２
内田今城跡　遠景
（南から）



写真撮影位置図②

図版３
Ｉ郭 → Ｉ郭②

図版４
Ｉ郭①（今城の一丁墓）



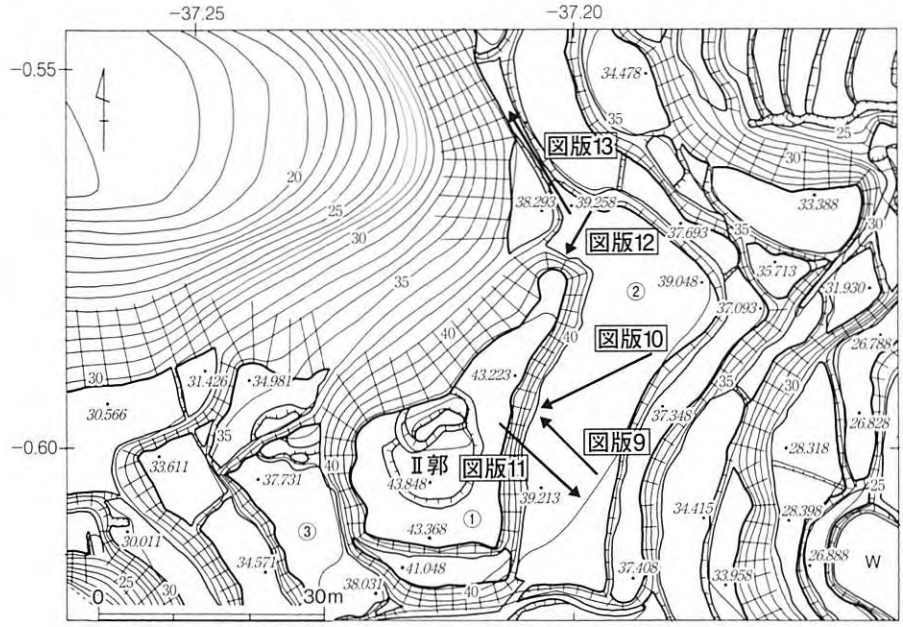
写真撮影位置図③

図版５
江戸時代の墓地
Ｉ郭南西下 Ａ箇所

図版６
Ⅰ郭④・Ⅰ郭－Ｂ間の法面

図版７
Ⅰ郭－Ａ東下の帯状地形

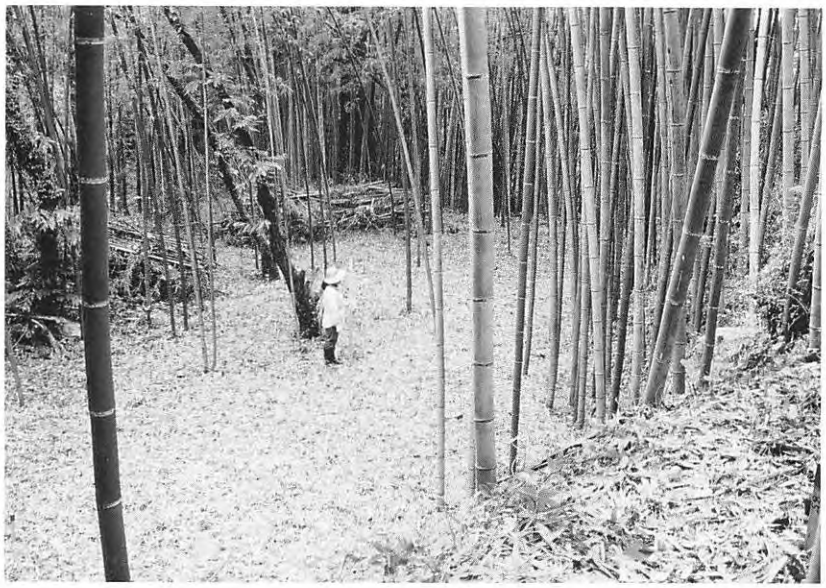
図版８
Ⅰ郭－Ｃの痩せ馬地形
（南→北）



写真撮影位置図④

図版９
Ⅱ郭② 西側法面の削り落とし
（南→北）

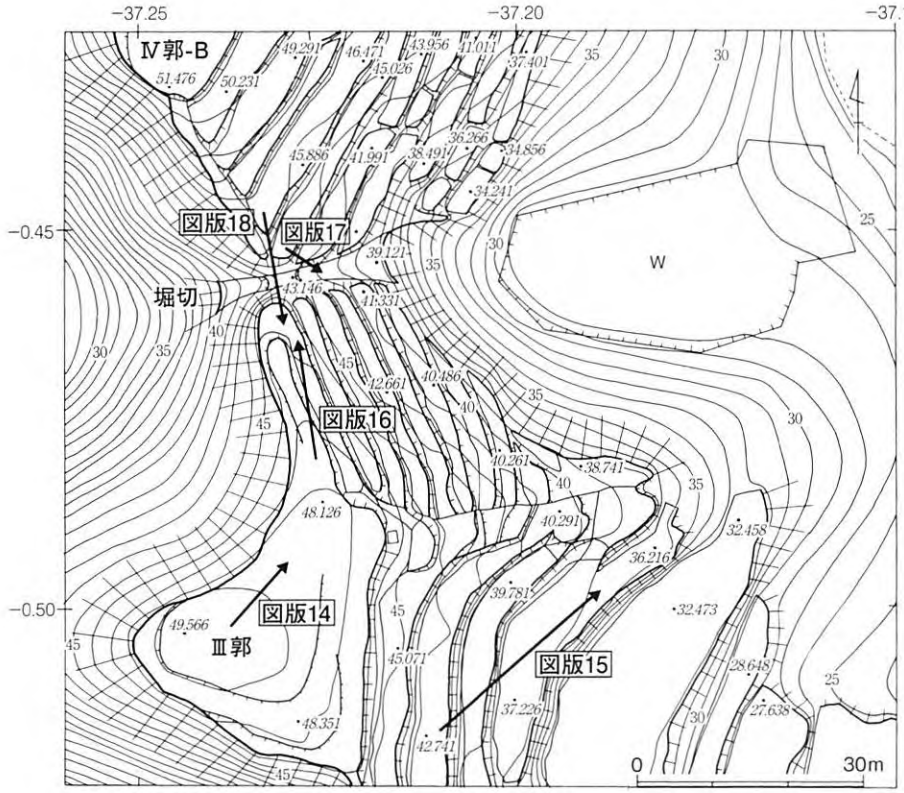
図版10
Ⅱ郭② 西側法面の削り落とし
（北→南）



図版11
Ⅱ郭①からⅡ郭②を見おろす
(西→東)

図版12
Ⅱ郭②
北側法面の削り落とし

図版13
Ⅱ郭・Ⅲ郭間の痩せ馬地形
(南→北)



写真撮影位置図⑤

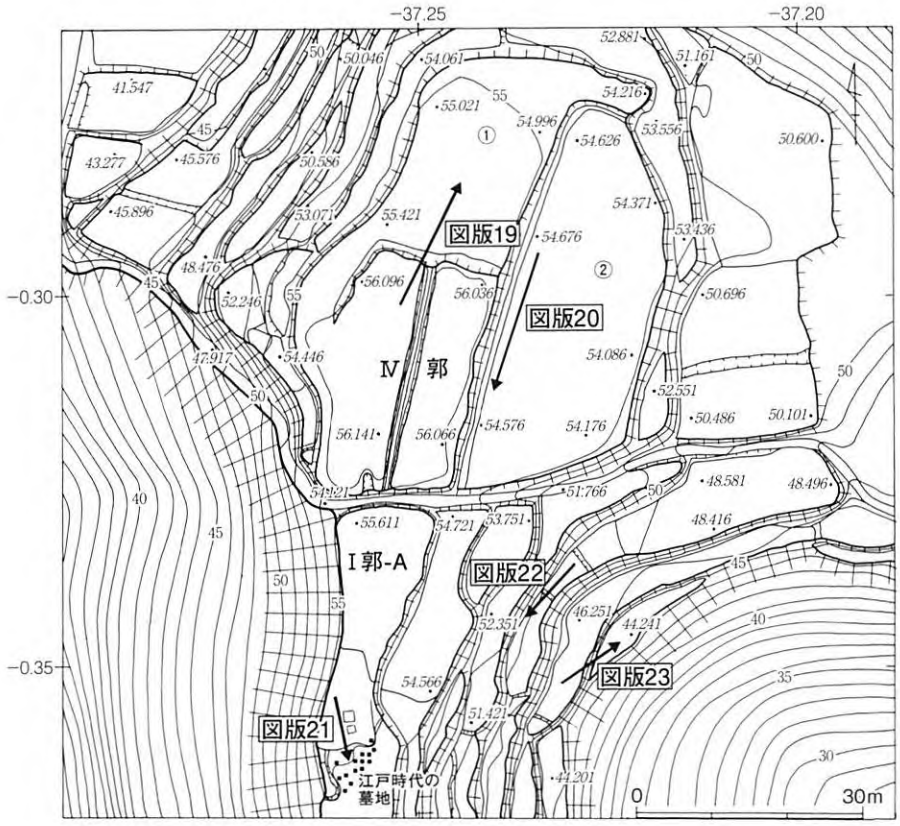
図版14
Ⅲ郭（南→北）

図版15
Ⅲ郭南東下の帯状地形

図版16
Ⅲ郭北側の張り出し区画

図版17
堀切（西→東）

図版18
Ⅳ郭－Ｂ→堀切→
Ⅲ郭北側の張り出し区画



写真撮影位置図⑥

図版19
Ⅳ郭 → Ⅳ郭①

図版20
Ⅳ郭・Ⅳ郭②間の法面

図版21
Ⅳ郭－A
江戸時代の墓地（北→南）

図版22
Ⅳ郭－A東側の帯状地形

図版23
Ⅳ郭－A東側の帯状地形

報 告 書 抄 録

書　　名	内田今城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告　第５集
編 著 者 名	大田幸博　　益永浩仁　　居石裕臣
編 集 機 関	和水町教育委員会　総合教育課
所　在　地	熊本県玉名郡和水町江田 3886
発行年月日	2009年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	調　査　期　間	調査原因
内田今城跡	熊本県玉名郡和水町 大字内田字今城・古閑	2007年４月～2009年３月	学術調査

遺　跡　名	主　　な　　遺　　構
内田今城跡	・Ⅰ郭①～④　Ⅰ郭－Ａ・Ｂ・Ｃ ・Ⅱ郭①～③　削り落としの急崖 ・Ⅲ郭 ・堀切 ・Ⅳ郭①・② ・帯状削平地

和水町文化財調査報告　第５集

内田今城跡

平成21年３月31日

〔編集発行〕
和水町教育委員会
〒865-0192　熊本県玉名郡和水町江田3886
☎0968-86-3131

〔印　刷〕
西本印刷
〒861-2241　熊本県上益城郡益城町宮園564-2
☎096-286-4151

この電子書籍は、『和水町文化財調査報告 第5集 内田今城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：和水町文化財調査報告 第5集 内田今城跡
発行：和水町教育委員会
〒861-0913　熊本県玉名郡和水町板楠76番地
TEL：0968-34-3047
電子書籍製作日：2024年2月28日